

令和6年度
新時代に対応した高等学校改革推進事業
(普通科改革支援事業)
第2年次 研究開発実施報告書



令和7年 3 月

広島市立美鈴が丘高等学校

目次

巻頭言

1 研究開発実施報告

- (1) 新学科で育成を目指す資質・能力……………3
- (2) 総合的な探究の時間の改善(学校設定科目【未来計画】を含む)……………6
- (3) コーディネーターに関する取組……………12
- (4) 探究活動を重視した各教科・科目の授業改善……………13
- (5) 特色・魅力ある先進的な学校運営
 - ①教育課程の開発……………18
 - ②チーム担任制……………21
 - ③修学旅行の充実……………23
- (6) 教員と生徒による学校改編検討組織「未来会議」……………27
- (7) 外部評価……………30
- (8) 広報活動……………38

2 連携機関等との意見交換・協議

- (1) コンソーシアム会議……………40
- (2) 運営指導委員会……………48

3 参考資料

- 新時代に対応した高等学校改革推進事業実施計画書……………57

はじめに

令和4年度より学校教育目標を「校訓『進取 友愛 節度』のもと、高い志を持ち、変化の激しい社会において自らの未来を切り拓き、『地域共生社会』の担い手となる人材を育成する」と設定し、これに基づいた本校の目指す生徒像を実現するために、令和5年度より「新時代に対応した高等学校改革推進事業」の指定校となり、この2年次となる令和6年度においては、令和7年4月設置予定のグローバル探究科(1学年240名定員)をまさに新時代において他校のモデルとなる、生徒にとっても教職員にとっても魅力あるものとするために準備を重ねてまいりました。

前年度に作成した「育成を目指す9つの資質能力」を土台に据えて、今年度は「自分で考え、判断し、主体的に行動する生徒の育成」を最上位概念とし、探究活動や教科学習だけでなくキャリアデザインや学級経営・部活動運営等、あらゆる学校教育活動において、生徒の主体性を育む支援を継続しています。従来の教育において、ともすれば慣習的に行われがちな「生徒が効率よく正解を知る」授業。ここに留まるのではなく、基礎基本の定着を踏まえた上で「生徒が試行錯誤により自分なりの正解を創る」姿勢を身に付けさせることを「学習の柱」として取り組んでいます。

これと同時に、自らの価値観や考え方を広げていくための「体験・思考の柱」として、「生徒がホンモノに触れる体験」を重視しています。ここでは、学校という枠にとらわれない学びとして、高校コーディネーター、コンソーシアム会議や学校運営協議会をフルに活用したフィールドワークや講演会等により多くの刺激を与え、考えさせる場面と同時に、生徒自らが様々なプロジェクトやコンテスト等へ積極的に参加する機会の確保をしてまいりました。

設置に向けての態勢を整える中で、こういった面での成果は表れつつありますが、まだ十分な手応えを得るに至ってはおりません。このことも踏まえながら、一年間の取組と成果について御一読いただければ幸甚に存じます。

結びとなりますが、これまで5年に渡り御指導と御助言を頂戴しております、岡山大学教師教育開発センター教授 高旗浩志 先生を始め、先進校視察で御協力いただいた数多くの高等学校の校長先生方や教職員・生徒の皆様に篤く御礼申し上げます。また、この事業の運営にあたり、広島市教育委員会学校教育部指導担当部長 星野和敏 様を始め、多くの関係者の皆様に御教授・御支援を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。大変ありがとうございました。

先述の「学習の柱」と「体験・思考の柱」を基にした学校教育活動を、来年度設置のグローバル探究科において推進し、新たな時代の先進校としての役割を果たしてまいります。引き続き、御指導をいただきますようよろしくお願いいたします。

令和7年3月

広島市立美鈴が丘高等学校
校 長 合 田 和 広

1 研究開発実施報告

(1) 新学科で育成を目指す資質・能力

ア. 令和 6 年度の振り返り

(ア)目標

令和 5 年度に作成した「育成したい9つの資質能力」のルーブリックを改善し、本校生徒及び教員が、具体的に内容が想起しやすいようにする。

(イ)目標達成に向けた取組の振り返り

【取組概要】

令和 5 年度版の「育成したい9つの資質能力」のルーブリックの、地域や社会の課題を見出す力（情報収集力・情報分析力・発信力）、正解のない課題に向き合い続ける力（自分力・思考力・行動力）、協同して課題を解決する力（調整力・連携力・実践力）として定義されるそれぞれの資質能力の記述を具体化し、生徒や教員と共有した際に伝わりやすくした。（【表1】「令和 6 年度広島市立美鈴が丘高等学校 育成を目指す9つの資質・能力のルーブリック(第 1 版)」参照）

【成果】

9つの各資質能力が学校の取組と対応し、具体的な教育活動の場面と結びつきやすくなった。

【課題】

9つの資質能力は数が多く、教員と生徒に浸透している状態とは言いづらい。

イ. 次年度への展望

学校教育目標を「これから必要とされる共通の資質能力＝主体性等」と「広島市における本校独自のミッション＝地域共生社会の担い手」に分解し、その両方に基づいた資質能力をそれぞれが分割された形で明示する。（【参考資料】参照）

9つという数にこだわらずに多くても5つ程度に絞り、各資質能力を表現するピクトグラムと合わせて再定義する。

【表1】

令和6年度 広島市立美鈴が丘高等学校 育成を目指す9つの資質・能力のルーブリック(第1版)

主要 3分野	9つの力	【学校教育目標に基づいた9つの資質・能力の全体像】 国際平和文化都市「広島」をフィールドとした学びにより地域社会の発展に貢献し続ける力を育成する。	
		レベル A(よい)	レベル S(とてもよい)
地域や社会の課題を見出す力	情報収集力	☐ 調べていることの一次情報を得ることができる。 ☐ インターネット上の web サイトや図書室の書籍を活用して情報を得ることができる。	☐ 課題の関係者や専門家から必要な情報を得ることができる。 ☐ 先行研究や関係する論文から情報を得ることができる。
	情報分析力	☐ 情報を他の同様のものと比較することができる。 ☐ 情報を単一の観点に基づいて整理できる。	☐ 情報を他の同様のものと比較し、共通点や相違点を明らかにすることができる。 ☐ 情報を複数の観点に基づいて整理できる。
	発信力	☐ 学校内や地域内に自分の考えた事を伝え、発信に対しての応援、助言、拡散など一定の反響を得ることができる。	☐ 日本全体や海外に自分の考えた事を伝え、発信に対しての応援、助言、拡散など一定の反響を得ることができる。
正解のない課題に向き合い続ける力	自分力	☐ 現状を受け入れ自己を改善しようとする姿勢がある。 ☐ 他者の意見を自分の成長につなげることができる。	☐ 自己の良さを見極め、磨き上げることができる。 ☐ 自分の考えを持ちながらも、他者の意見を聞き自分の成長につなげることができる。
	思考力	☐ 自分の考えについて根拠を持って述べるができる。(論理的思考力)	☐ 自分や他者の意見について批判的に考え、新たな問いを持つことができる。(批判的思考力)
	行動力	☐ 探究学習等を通して疑問に思ったことや課題に感じていることに対して、関係者等にインタビュー調査をしたり、現地を訪問したり、価値創造や課題解決につながる行動を起こすことができる。	☐ 探究学習等を通して疑問に思ったことや課題に感じていることに対して、実際に価値創造や課題解決のための行動を起こすことができる。
協同して課題を解決する力	調整力	☐ 機会が与えられれば自分の行動や考え方を振り返り、よりうまくいくように行動や考え方を調整することができる。(言われたら振り返る:他律的)	☐ 常に自分の行動や考え方を振り返り、よりうまくいくように行動や考え方を調整することができる。(言われなくても振り返る:自律的)
	連携力	☐ 引き受けた役割に責任を持つことができる。 ☐ 他者と業務に必要なコミュニケーションをとりながら協力することができる。	☐ 引き受けた役割において自分にしか出せない価値を出すことができる。 ☐ 他者の背景や特性、特長が活きるようにコミュニケーションをとりながら協力することができる。
	実践力	☐ 与えられた課題に取り組むことができる。 ☐ 指導されたことを理解し動くことができる。	☐ 自ら課題を設定し取り組むことができる。 ☐ 指導されたことを理解し、主体的に考えながら動くことができる。

一 生徒指導理念の策定と各教育方針の体系化

抽象度が高い学校教育目標を教職員、生徒、学校関係者に「生徒指導理念」として再提示し、共有度を高める。

【学校教育目標】

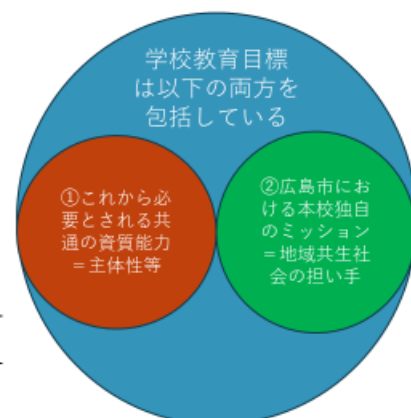
校訓「進取 友愛 節度」のもと、高い志を持ち変化の激しい社会において、自らの未来を切り拓き、「地域共生社会の担い手」を育成する。

【右記①について生徒指導理念で改めて定義】

時代に合わせて変化し、他者と協同しながら目的に応じて主体的に考え、行動することができる生徒を育成する。→全ての教育方針に反映

【右記②について教育活動内で推進】

探究の時間を中心に、家庭科等でも地域と連携

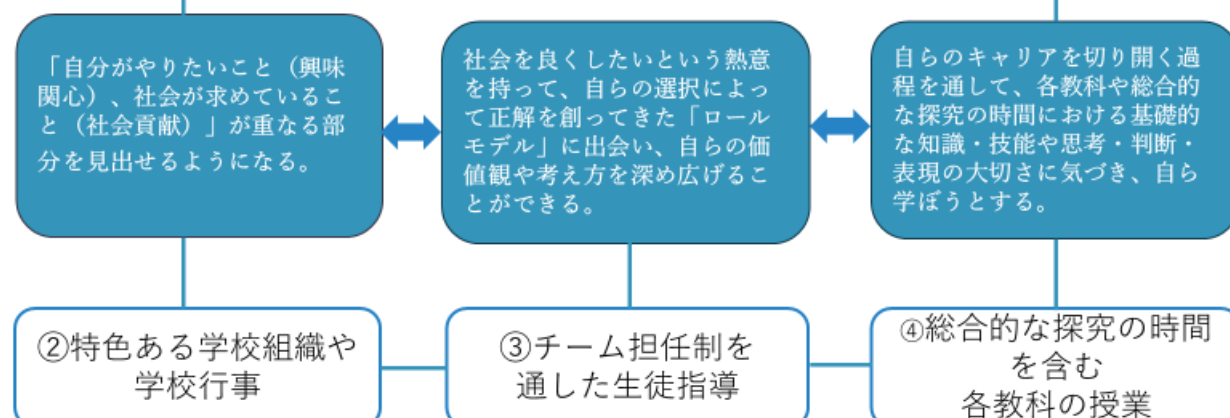


3

一 生徒指導理念の策定と各教育方針の体系化

「生徒指導理念」を軸に学校の全ての教育方針を策定し、「主体性」と「対話」と「自己選択」を重視した教育活動を展開していく。

①キャリアデザインの3つの軸



4

(2) 総合的な探究の時間の改善(学校設定科目【未来計画】を含む)

ア. 令和 6 年度の振り返り

(ア)目標

- a 1学年「未来計画」の先行実施による課題の把握
- b 2・3学年「総合的な探究の時間」の時間の充実

(イ)目標達成に向けた取組の振り返り

【取組概要】

a 1学年「未来計画」について

令和6年度の1学年では、「総合的な探究の時間」を「未来計画」と題して実施し、履修単位数も2単位として実施した。「未来計画」は、「人間形成領域」「思考深化領域」「探究実践領域」の3領域からなる学習内容をもとに、探究活動に不可欠な資質能力を養うことを目的としている。今年度は、その先行実施と位置づけ、以下のプロジェクトを実施した。

時期	プロジェクト	内容
4・5月	適性診断 合意形成	探究を実践するにあたり、自分自身の適性を理解し、他者と対話し合意形成するために必要な素養を養う。【人間形成領域】
5・6・7月	【好き】探究プロジェクト	自分の【好き】な事物をもとに、課題の設定、情報の収集、情報の整理・分析、まとめ・表現の方法を身に付ける。【思考深化領域】
8・9月	レジリエンス	探究を実践するにあたり、粘り強く取り組む姿勢や、批判を受け入れて立ち直る素養を養う。【人間形成領域】
10・11月	平和探究プロジェクト	「国際平和文化都市『広島』」をフィールドとした実践を通じて、探究のプロセスを繰り返す。【探究実践領域】
12月	区役所連携プロジェクト	広島市佐伯区役所から地域が抱える課題をいくつか提示してもらい、「保育・教育プログラム」「防災プログラム」「美高半径3Km プログラム」に分かれ、課題解決に取り組む。【探究実践領域】

b 2・3学年「総合的な探究の時間」について

2学年の「総合的な探究の時間」は、1単位で以下の内容を実施した。

時期	プロジェクト	内容
4～11月	修学旅行進路別研修プロジェクト	修学旅行で実施する進路別研修(各自の希望進路に応じて東京の企業、官公庁、教育機関、社会教育施設等を訪問し、希望進路に対する知見を深める。
12～2月	個人探究プロジェクト	個人の興味関心に基づいたテーマを設定し、調査を実施する。

3学年「総合的な探究の時間」については、1単位で以下の内容を実施した。

時期	プロジェクト	内容
4～7月	地域探究プロジェクト(昨年度からの継続)	昨年度末から「地域の課題を希望進路の学問分野をふまえて解決策を提示する」というコンセプトで実施していた「地域探究」を継続実施した。特に今年度は、昨年度3月に実施した「探究発表会」で講師の先生方から頂戴した「一次情報の不足」という課題をふまえ、学校コーディネーターと連携しながら、積極的に企業や専門家につなげ、フィールドワークを促した。
12～1月	マイヒストリープロジェクト	卒業を迎えるにあたり、自身の人生の転機や画期、転換、探究を通じて得た経験を振り返り、考えの変化や自らの特性をメタ認知し、探究抄録としてまとめる。

【成果】

a 1学年「未来計画」の成果

1学年「未来計画」の成果は、探究実践領域の「区役所連携プロジェクト」において、区役所と連携できた点である。本校のコンソーシアム会議の一員である佐伯区役所地域おこし推進課の方に依頼し、本校が立地する広島市佐伯区の地域課題をあらかじめ提示していただいた。その中から、「保育・教育プログラム」、「防災プログラム」、「美高半径3Km プログラム」に生徒が分かれ、様々な方法で解決策を考案し、生徒が考案した解決策は、佐伯区役所にフィードバックすることとなっている。

こうしたフィードバックを意識し、例えば「保育・教育プログラム」では、美鈴が丘小学校へ聞き取り調査を実施したり、「防災プログラム」では広島市防災センターを訪問したりするなど、

外部機関との積極的な連携やフィールドワークを促した。また、「美高半径3Kmプログラム」では、本校周辺の魅力的なスポットのPR動画を作成する際に、地域の写真店の方に美しい写真の撮り方講座や、映画作成を専門とする卒業生に動画作成のコツについて授業してもらうなど、外部の人材を積極的に有効活用できた。

b 2・3学年「総合的な探究の時間」の成果

2学年の成果は、「個人探究」という新たな取組みの端緒を開いたことである。後述するが、今年度の3年生の取組である「地域探究」では当初、地域の課題“を”希望進路の学問分野“で”解決探究するという方向性で実施してきたが、この方向性だと生徒の課題設定が非常に困難を極めてしまった。そこで、地域の課題“を”ではなく、希望進路の学問分野の課題“を”広島という地域“で”解決するという転換、いわば「目的としての地域ではなく、フィールドとしての地域」という発想に基づいて探究を進めていくべきだという反省のもと、この「個人探究」の実施に至った。

また、「個人探究」では、探究を指導する教員を「チューター」とし、希望するチューターは生徒が自ら選ぶこととした。そのために教員は、自らの興味関心や学生時代の専門分野を生徒に披瀝し、それをもとに生徒が指導してもらいたいチューターを決定した。また、チューターには、校長、教頭をはじめ、学校コーディネーターや養護教諭にも担当してもらい、一人のチューターが受け持つ生徒を可能な限り少なくすることで、手厚い「伴走」支援ができるよう工夫した。

3学年「総合的な探究の時間」の成果は、一次情報の獲得による探究の質的向上である。3年生では7月の探究発表会に向けて内容の質的向上を図るために、一次情報の獲得に力を入れた。一次情報の獲得は、昨年度3月に実施した探究発表会で講師にお招きした先生方から頂いた課題であった。

そこで今年度の3年生では、積極的にフィールドワークへ行くことを促した。全員が実施したわけではないが、13名の生徒が地域や企業と接続して探究を深めた。主な行先は、広島市安芸区役所、広島市教育委員会(3名)、エブリイ舟入本店、ひまわり歯科、広島平和文化センター、広島県警察本部、Wood Egg お好み焼き館、広島修道大学、広島電鉄、福祉の美容室 nana、結婚式場リーベリアであった。

また、フィールドワークを実施しない生徒でも可能な限り一次情報を獲得できるよう、広島県雇用労働政策課が運営する「就活スターティングサイト GO!ひろしま」を活用し、希望分野ごとに地域課題の解決に取り組む地元企業の方をお招きし、出前講座をお願いした。

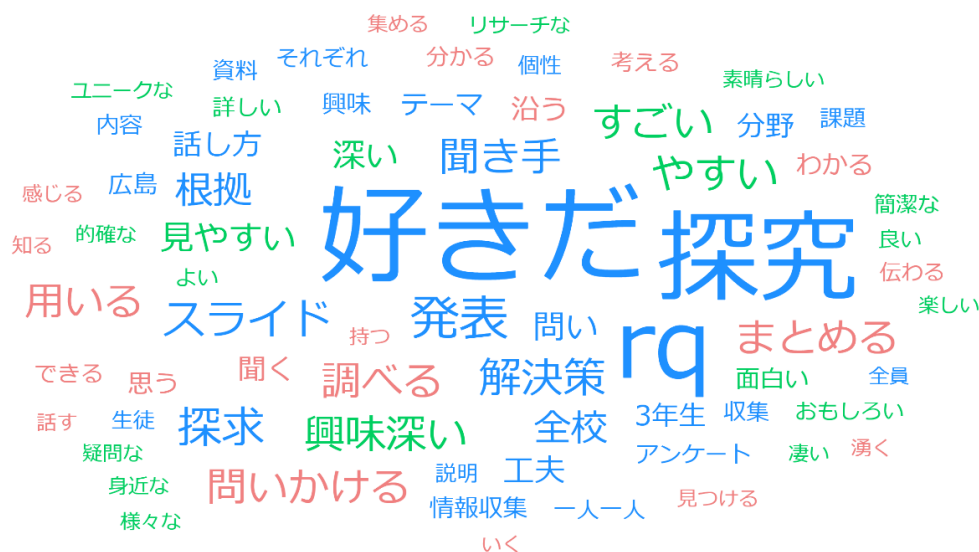
こうした支援が功を奏し、7月の探究発表会後のアンケートでは以下のようなコメントが寄せられた。

- ・みんな詳しく調べていてすごかった。実際に聞いてきたこととかアンケートとか説得力があった。
- ・みんな理論的に簡潔に調べたことを発表していてすごくわかりやすかったです。批評もそういう見方があるんだなと新しい気づきをくれました。

- ・発表者みんな普段私が考えることのない視点で探究していてとても興味深かった。FWや先生、大学生、小中学生にもアンケートをとっていてとても行動力があり、より信憑性のある根拠や具体例になっていてすごいと思った。
- ・去年よりも発表の質が上がっている気がした。全員話し方が上手で、たくさんの情報収集をしていて素晴らしいと思った。
- ・前回の内容からさらに深掘りして RA を設定していて全て興味深い発表だった。ネットで調べて終わりではなく、アンケートをとったり実際に現場に行ったりして情報を集めていて凄かった。
- ・自分は既にあるアイデアをまとめることくらいしかできないけど、発表者たちは、自分で解決策を考えたり、自分でインタビューしたり、実際に足をはこんだりしていてすごいなと思いました。自分では思いつかないような疑問や仮説をたてていておもしろかったです。テーマを大きなテーマにするのではなく絞っておくのが大切だとわかりました。今日の発表を聞いて、自分も既に誰かがアンケートやインタビューをしたデータをインターネットから引用するのではなく、自分で標本調査するということをこれからの探究で行っていきたいです。
- ・今回発表していた全員が、自分の進路と広島市についてしっかり繋げていて、とても個性あふれる発表だったので、本当に楽しかったですし、新たな興味を持ったりすることもできました。また、探究発表会は、美高のとても良い魅力だと思うので、生徒や先生、講評してくださる方だけではなく、もっと地域の人や企業の方などにも一緒に見てもらうのも良いと思いました。
- ・来年自分達ができるのが怖くなるくらいレベルの高いプレゼンでした。興味の追求の凄さというものを改めて感じました。あとは、皆さんが一般の人ではわからないような単語を説明していたのも良かったです。

もちろん上記の8つの意見は一部のものに過ぎないが、3年生の発表を聞いた生徒たちがフィールドワークを実施してアンケートをとったり、直接インタビューしたりして一次情報を収集している点を高く評価している。また、それによる発表自体の質的向上に圧倒される感想も見受けられる。

また、膨大な自由記述の内容を AI テキストマイニングしてみると以下ようになる。



最も中心に大きく「好きだ」と「探究」という単語が現れているが、これは「好きだと思ったことを探究している」といった、興味関心と地域課題を結びつけている点に生徒が注目したことを示しているように思われる。また、「RQ(リサーチクエスト)」が大きく現れているのは、「RQが興味深い」「RQがわかりやすい」といった内容を反映したものと思われる。その他、「興味深い」「調べる」「用いる」「解決策」「根拠」「聞き手」「問いかける」「やすい」「すごい」といったワードからも、一次情報を調べグラフやデータとして用いて根拠づけつつ、聞き手に問いかけながらわかりやすく伝えているといった点に生徒たちが「すごい」と感じとった傾向があると考えられる。

以上のことから、3学年の「総合的な探究の時間」の成果は、一次情報の獲得による探究の質的向上といえる。

【課題】

全学年に共通した課題が次の2点である。

① プロジェクトごとのつながりや学校全体の「総合的な探究の時間」の位置づけ

プロジェクトごとのつながり、学校全体の「総合的な探究の時間」における各プロジェクトの位置づけが不明瞭となっており、何のためにこのプロジェクトを行なっているのかがわからないという意見は、全学年の教員から指摘されている課題である。教育研究部や拡大未来会議のなかでは、位置づけが共有されているものの、全教員にまで徹底して共有できなかった点が今年度の課題である。

また、進路指導の方針やキャリア教育との連関もできなかった点は大きな課題である。特に2年生の志望理由書作成と「個人探究」が接続できず、生徒にとって負担となった面もあった。

② 教員がどれだけ生徒と対話を深め、「壁打ち役」になれるか。

全学年の探究において共通する課題として、教員がどれだけ生徒と対話を深め、いわば「壁打ち役」になれるかどうか大きな課題である。

例えば、1年生の「未来計画」における「区役所連携プロジェクト」では、区役所から与えられた課題に対する解決策を区役所に提示し、最終的には何らかの形でアウトプットすることになっている。しかし、今年度はその点を意識しすぎてしまい、「早くフィールドワークに行かないといけない」という意識が生まれた結果、「何のためにフィールドワークに行くのか」「どのようなことを聞きたいのか」という目的が不明瞭なままフィールドワークを希望する生徒が続出した。この状態でフィールドワーク先と接続しようとして、かえって先方を困らせる事態もあった。

もちろん、じっくり考える時間的余裕がないことも背景にはあると思われるが、そのなかでも教員が生徒と「なぜフィールドワークに行くのか」「何を聞きたくて調査するのか」をじっくり深掘し、「壁打ち役」にならなければ意義深いフィールドワークになるところか、しっかりと力が身に付き、自己の在り方・生き方に迫るような高校生らしい高水準な探究とはなり得ない。

イ. 次年度への展望

今年度の課題をふまえ、次年度には①生徒に身に付けさせたい力をもとに、3年間の「総合的な探究の時間」の年間計画を進路指導部とも連携しながら策定すること、②教員と生徒が対話して「壁打ち役」となり、生徒が考えを深められるようなスキルについて、手引きを作成したり、研修の機会を設けたりすることによって改善していきたい。

(3) コーディネーターに関する取組

ア. 令和 6 年度の振り返り

(ア)目標

広島市立美鈴が丘高等学校の高校コーディネーターの取組により、本校の探究学習に関する企業・大学・地域等との連携・協働が効果的に進むよう研究に取り組む。

(イ)目標達成に向けた取組の振り返り

a 地域連携の深化

広島市内の企業や大学との連携を強化し、生徒が主体的に課題を探究する機会を提供できるようにした。

b 探究発表会の実施

3 年生生徒による探究発表会に向け、高校コーディネーターが教員と連携しながら指導・助言を行った。

c 新学科設立への準備

令和7年度開設の『グローバル探究科』に向け、教育課程の検討や資質・能力の育成目標設定に、高校コーディネーターも参画した。

【成果】

高校コーディネーターが連携して行ったフィールドワークを通じて、生徒の地域課題に取り組む姿勢を育むことが出来た。

3 年生生徒による探究発表会では、それぞれの生徒が個性を発揮することができ、終了後、地域関係者からも一定の評価を得ることが出来た。

【課題】

生徒の「探究テーマの深掘り」の着地点と、企業・団体等の専門家のマッチングにおいて、多くの改善の余地がある。

3年生の探究発表会では、実体験を伴う探究発表には躍動感の様なものが感じられ、「探究」には、「フィールドワーク」が必須だと思われるが、最終的に選抜された 10 名の発表のうち、実際にフィールドワーク調査等に行った成果を発表した生徒はその半数であった。

イ. 次年度への展望

引き続き、高校コーディネーターが中心となって探究学習に関する企業・大学・地域等との連携・協働に取り組み、本校教員との連携もさらに深めて生徒の指導を充実させていきたい。

(4) 探究活動を重視した各教科・科目の授業改善

ア. 令和 6 年度の振り返り

(ア)目標

生徒の「問い」から始まり、「社会につながる課題」を個人思考と協同学習で学ぶ授業へと改善するために、全教員で取り組む体制を構築する。

(イ)目標達成に向けた取組の振り返り

【取組概要】

生徒の「問い」から始まり、「社会につながる課題」を個人思考と協同学習¹で学ぶ授業へと改善するために、全教員で取り組む体制を構築するべく、昨年度は「問いをもて授業に臨む」ことを重点課題とした。今年度は、「生徒に学びのハンドルを預ける(教師のほどよい不親切と適切な支援)」を重点課題とした。

「生徒に学びのハンドルを預ける」とは、教師が「ここは自分でやっごらん」と学習を生徒に預けるといった「個の自力解決」の余地をいかに授業で設けるか、そして努力を要する生徒にどのように支援を講じるかということを各教科で模索していくことをめざした。

a 教員研修の実施による授業改善の重点目標の共有および現状把握

4月3日、教員研修において令和6年度の授業改善の重点目標の周知および共有を行った。「教師のほどよい不親切」あるいは「個の自力解決」の場面を設けることは、本校がこれまで培ってきた協同学習の重要な要素であると同時に、探究的な学びのプロセスでいうところの「情報の収集・整理・分析」に位置づくものと捉えている。

本研修ののち、教員対象授業改善アンケートを実施した。その結果、「授業のなかで生徒が

¹「協同学習」とは、次の4つの条件を満たす(満たそうとする)グループ学習であるとされている。

- ① 互恵的相互依存関係の成立:クラスやグループで学習に取り組む際、その構成員すべての成長(新たな知識の獲得や技能の伸長など)が目標とされ、その目標達成には構成員すべての相互協力が不可欠なことが了承されている。
- ② 二重の個人責任の明確化:学習者個人の学習目標のみならず、グループ全体の学習目標を達成するために必要な条件(各自が負うべき責任)をすべての構成員が承知し、その取り組みの検証が可能になっている。
- ③ 促進的相互交流の保障と顕在化:学習目標を達成するために構成員相互の協力(役割分担や助け合い、学習資源や情報の共有、共感や受容など情緒的支援)が推奨され、実際に協力が行われている。
- ④ 「協同」の体験的理解の促進:協同の価値・効用の理解・内化を促進する教師からの意図的な働きがある。例えば、グループ活動の終わりに、生徒たちにグループで取り組むメリットを確認させるような振り返りの機会を与える。

(閑田一彦・安永悟「協同学習の定義と関連用語の整理」日本協同教育学会『協同と教育』第1号 2005 年 p.13～p.14)

自ら取り組む(生徒に学びのハンドルを預ける)ような工夫をどの程度実施していますか」という質問項目に対して「ほぼ毎時間実践している」「単元に1度は実施している」と答えた教員の割合は33%であり、全校体制での実施には程遠い現状がうかびあがった。

b 協同学習公開授業研究会の実施

「生徒に学びのハンドルを預ける」ような授業改善を推進するために、11月7日、協同学習公開授業研究会を開催し、講師の先生には、岡山大学教師教育開発センター副センター長教授 高旗浩志先生をお招きした。

今年度は3年理科(化学)の授業実践を事前に録画し、ストップアンドモーション方式で視聴しながら注目すべき点を全体で共有した。

c 授業観察の実施

11月8日～1月31日までの期間を授業観察期間とし、「学びのハンドルを預ける」という重点項目を意識した授業を教員内で公開した。

例年、各個人が教員全体に実践日を周知して実施する、いわば「個人が全教員に向けて実施する」という形式で授業観察を実施していたが、実施率が伸び悩んでいることをうけ、今年度は先進校の事例を参考にし、教員を4人一グループに編成し、「個人がグループに向けて実施する」という対象規模を限定した実施とした。これにより、授業を公開する心理的抵抗感の減少を期待した。

【成果】

a 協同学習に対する意識向上

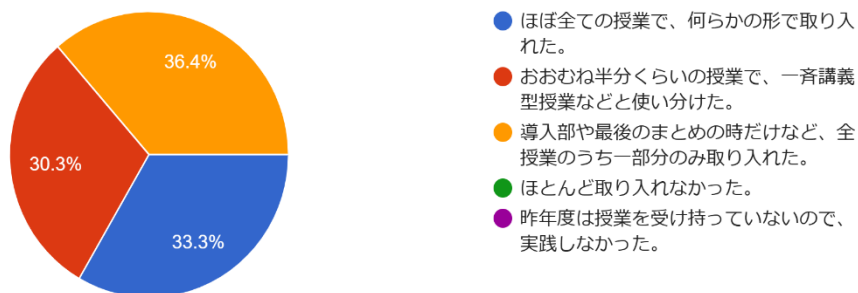
教員対象アンケートの結果の推移から、協同学習に対する教員の意識向上が見受けられる。6月と1月に実施した教員対象アンケートにおける「昨年度(1月は今年度)、協同学習について、どの程度実施されましたか」という質問項目に対して、6月の第1回目では「ほぼすべての授業で何らかの形で取り入れている」、「おおむね半分程度の授業で一斉講義型授業と使い分けた」と回答した教員は63.6%であった(【資料1】)。それに対し、1月の第2回目では「ほぼすべての授業で何らかの形で取り入れている」、「おおむね半分程度の授業で一斉講義型授業と使い分けた」と回答した教員は76.2%と増加した(【資料2】)。また、6月および1月ともに「ほとんど取り入れなかった」と回答した教員は0%であった。

また、全学年の生徒対象授業評価アンケートにおける「この授業は、協同的に学ぶ場面を設けている」という質問項目に対しては、以下のような結果が見られた。

6月の第1回目では、回答数1647件のうち当該質問項目に対して肯定的回答の件数が1457件、割合にして約88.4%であった。また、1月の第2回目では、回答数1886件のうち当該質問項目に対して肯定的回答の件数が1648件、割合にして約87.3%であった(【資料3】)。このことから、協同学習に対する教員の意識の向上が成果として挙げられる。

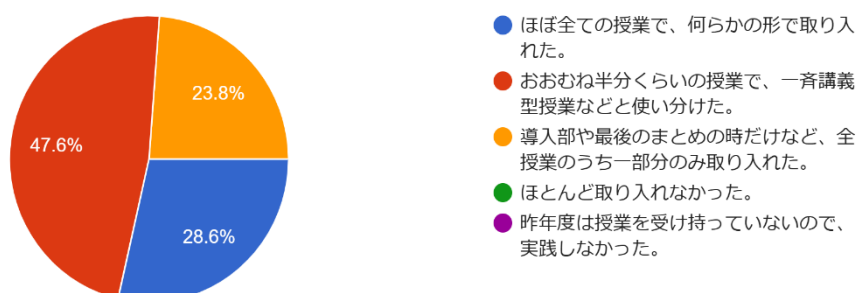
【資料1】教員対象アンケートにみる協同学習の実施率(6月)

問2 昨年度、協同学習について、どの程度実践されましたか。今年度から美鈴が丘高校に勤務される先生方も、前勤務校(高等学校以外も含む)での授業を振り返って、回答をお願いします。なお、このアンケートにおける協同学習の定義は「支持的風土のもと、集団が支え合い良くなっていくことで、生徒自身に学び取らせる授業」とします。



【資料2】教員対象アンケートにみる協同学習の実施率(1月)

問2 今年度、協同学習について、どの程度実践されましたか。なお、このアンケートにおける協同学習の定義は「支持的風土のもと、集団が支え合い良くなっていくことで、生徒自身に学び取らせる授業」とします。



【資料3】生徒対象授業評価アンケートにおける「この授業は、協同的に学ぶ場面を設けている」という質問項目に対する肯定的回答の件数と割合

	肯定的回答	否定的回答
6月(n=1647)	1457 件(88.4%)	190件(11.6%)
1月(n=1886)	1648 件(87.3%)	238件(12.7%)

* 生徒対象授業評価アンケートは、全ての授業科目ごとにアンケートを作成し、生徒が回答した。n(総数)は、すべての授業科目のアンケート回答件数の和である。

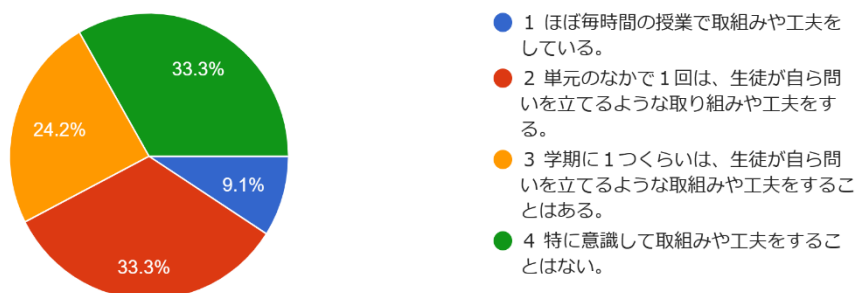
b 問いに対する教員の意識向上

教員対象アンケートの推移から、生徒が自ら問いを立てるような工夫を教員が意識していることがうかがえる。教員対象アンケートにおいて、「生徒が自ら問いを立てるような具体的な取り組みや工夫をどの程度実践していますか」という質問項目に対して、「ほぼ毎時間の授業で取り組みや工夫をしている」「単元のなかで1回は、工夫をしている」と答えた教員の割合が、6月の第1回目では42.4%であったのに対し(【資料4】)、第2回目の1月では76.2%と大きく増加した(【資料5】)。

【資料4】教員対象アンケートにみる教員の問いへの意識(6月)

問7 生徒が自ら問いを立てるような具体的な取り組みや工夫をどの程度実施していますか。

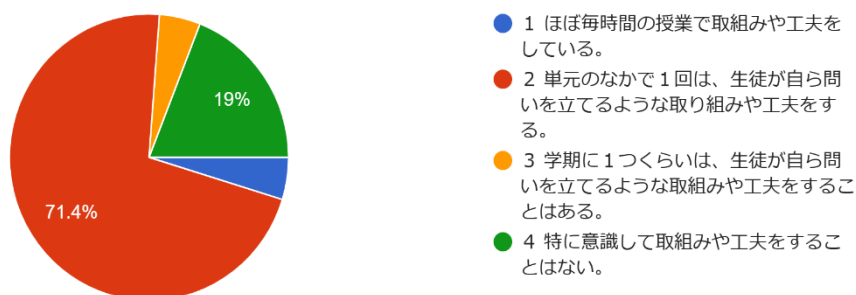
33 件の回答



【資料5】教員対象アンケートにみる教員の問いへの意識(1月)

問7 生徒が自ら問いを立てるような具体的な取り組みや工夫をどの程度実施していますか。

21 件の回答



c 「生徒に学びのハンドルを預ける」ための視点の獲得

11月7日の協同学習公開授業研究会では、理科(化学)の授業実践を報告した。授業実践者である教諭が「生徒に学びのハンドルを預ける」ために意識した点は以下のとおりであった。

- ・1回の授業だけで成立させようとしない。
- ・教師がすべてを教える必要はない(教師が答えを言わない)。
- ・生徒に課題解決のプロセスを表現させる。
- ・評定を出すためではなく、生徒の学びの進捗、深度を測る方法を確立する。

以上の4つの点にヒントを得て、「教師が答えを言わない工夫」や「個の自力解決の時間をたっぷりと確保する」という工夫は、授業観察期間で一定数見られたように思われる。

【課題】

課題としては、以下の点があげられる。

第一に、各教科を探究的な授業へと改善するために、単元計画の作成が重要性を増す点である。毎時間、教科横断的な授業や探究のサイクルをまわすような授業は現実的ではない。単元計画の中で、問いを表現する活動を取り入れる時間、知識を習得する時間など、単元全体の中で課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ表現を意識した授業となるよう、単元計画の作成を意識するべきである。

しかしながら、本校の実態として、学校全体で授業改善を実施するための組織や環境が脆弱である。これが第二の課題である。これまで本校では、授業改善は学力向上推進委員会や将来構想検討委員会という委員会組織が中心となり、管理職を中心に教科を超えた複数の教員が主導して取り組みが実践されてきた。

しかしながら、昨年度以降、こうした委員会組織がなくなり、それまで委員会が担っていた業務が教育研究部の学力向上推進担当という一人の個人の業務となってしまった。学校全体で授業改善を実現させていくのならば、拡大未来会議が中心となり、各教科に授業改善を主導できるような組織体制整備が急務であるように思われる。

イ. 次年度への展望

生徒の「問い」から始まり、「社会につながる課題」を個人思考と協同学習で学ぶ授業へと改善するために、全教員で取り組む体制を構築するべく、昨年度は「問いをもって授業に臨む」、今年度は「生徒に学びのハンドルを預ける」を重点改善事項としてきた。

次年度は、正解のない課題に向き合い続ける力を育成するべく、各教科の授業で「自分の思いを紡ぐ」ことを重点目標としていきたい。より具体的には、正解のない課題に対して、自分なりの考えを形成して他者に伝えることを各教科で考えていきたい。

(5)特色・魅力ある先進的な学校運営

① 教育課程の編成

ア. 令和 6 年度の振り返り

(ア)目標

グローバル探究科の目標を達成するために必要な資質能力を育成する教育課程を、各教科と協議しながら編成し、公表する。

(イ)目標達成に向けた取組の振り返り

【取組概要】

拡大未来会議で、育てたい生徒像を共有し、それをもとに原案を作成した。具体的には、高等学校3年間で「好き」を極めるために、「問い」を立ててそれをじっくりと「探究」し、上級学校でさらに深める生徒像を設定した。そのため、卒業後の進路のメインルートとして総合型選抜や学校推薦型選抜を利用した大学進学を想定した。

生徒が自主的自律的に使える時間を確保するため、第1学年から第3学年前期は週32時間とした。さらに特に第3年生後期は各自が希望進路との接続に向けた自主的な活動の時間を確保させるために、週30時間とした。

次に、1年次に学校設定教科「未来計画」を2単位とし、2・3年生で「総合的な探究の時間」の授業として「グローバル探究」を各4単位設定した。これらの時間を核に生徒は探究活動を進める。一般的な普通科よりも生徒が探究活動に多くの時間を割けること、教員が壁打ち役として多くの時間かかわることが出来ることが重要であると考えた。

残された時間に各教科科目を標準単位数で設定した。その際、教科をまたいだカリキュラムマネジメントが可能になるように配慮した。また、全教科をまんべんなく学習するのではなく、「好き」を極めるために教科を選択して学習しやすいように設定した。特に第2学年に「理数探究基礎」第3学年に「理数探究」の時間を選択科目として設定し、理数系に特化した生徒の興味関心や資質能力の伸長を図ることが可能になるように設定している。

第3学年では、「余白」の時間を設定した。これは、授業をとらずいわゆる「空き時間」として、空き教室や図書館などで自分の課題に自主的自律的に取り組む時間である。1人1人の卒業単位数は異なっていくが、自分の「好き」とことん極める時間、自分の将来に向けてしっかりと向き合う時間として活用する時間が必要であると考えた。

以上を踏まえ、原案を作成し、教科主任会で議論の上合意形成を図り、決定した。

【成果】

「令和7年度入学生 教育課程」として、3年間の教育課程表を作成した。

【課題】

時間割作成について、従来より時間を要すると思われる。

教科登録は希望進路と密接にかかわる。また、総合型や学校推薦型での進学をメインルートとするため、大学入試の時期が早くなる。従来の、全教科履修して様々な進路に対応させていく指導ではなく、低学年からのキャリア教育を充実させて自己決定を早めさせていく指導が必要である。

第3学年での「余白」の時間が有意義に過ごせるように自主的自律的な態度を低学年で育成していきたい。

イ. 次年度への展望

学年進行で課題を整理し、随時修正をしていく。

「グローバル探究」を核にした、教科横断型のカリキュラムマネジメントを行っていく。

令和7年度入学生 教育課程

赤字は必修科目

			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1 年	1 年		現代の国語		言語文化		歴史総合		数学Ⅰ		数学A		数学Ⅱ	化学基礎		体育		保健	芸術Ⅰ		英語コミュニケーションⅠ			論理・表現Ⅰ		家庭基礎		情報Ⅰ		未来計画		L H R		
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
2 年	自然科学系 探究コース		論理国語	古典探究		地理総合	公共	数学Ⅱ	数学B	数学C	化学	物理基礎	生物基礎	体育	保健	英語コミュニケーションⅡ	論理・表現Ⅱ	グローバル探究					L H R											
				理数探究 基礎																														
	人文・社会系 探究コース		論理国語	古典探究		地理総合	公共	日本史探究		数学Ⅱ	数学B	地学基礎	生物基礎	体育	保健	英語コミュニケーションⅡ	論理・表現Ⅱ	グローバル探究					L H R											
世界史探究								芸術Ⅱ																										
								家庭探究																										
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
3 年	自然科学系 探究コース		前期	論理国語	古典探究		政治経済	数学Ⅲ		数学C	化学	物理			体育	情報 探究	英語コミュニケーションⅢ		論理・表現Ⅲ	グローバル探究					L H R									
					理数探究			数学探究α				生物				余白																		
					余白											余白																		
			後期	論理国語	古典探究		政治経済	数学Ⅲ		数学C	化学	物理			体育	情報 探究	英語コミュニケーションⅢ		論理・表現Ⅲ	グローバル探究		L H R												
					理数探究			数学探究α				生物				余白																		
					余白											余白																		
	人文・社会系 探究コース		前期	論理国語	古典探究		日本史研究		政治・経済		数学C	化学探究	生物探究	体育	情報 探究	英語コミュニケーションⅢ		論理・表現Ⅲ	グローバル探究					L H R										
							世界史研究		倫理		芸術表現	芸術研究	芸術探究																					
											地理探究		余白												余白	余白								
			後期	論理国語	古典探究		日本史研究		政治・経済		数学探究γ	化学探究	生物探究	体育	情報 探究	英語コミュニケーションⅢ		論理・表現Ⅲ	グローバル探究		L H R													
							世界史研究		倫理		芸術表現	地学探究	芸術探究																					
											地理探究		余白									余白	余白											
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32

※3年生の選択科目は、前期後期ともに2年秋に教科登録を行い、原則通年で行う。（人社コースの数学Cのみ前期後期で授業が変わる）

※芸術系科目は音楽・美術・書道から選択

※理数探究はITで行う

※余白（空きコマ）を選択しないものは、図書室・自習室・食堂等で自分の課題に取り組む（監督者はつけない）

※未来計画・グローバル探究は原則学年団で行い、教員の時間数に入る（コマ数として計算）

	標準単位数を下回っているもの
	標準単位数を上回っているもの
	学校設定科目など

② チーム担任制

ア. 令和 6 年度の振り返り

(ア)目標

複数の担任がチームとなって生徒に対応することによって、これまで一人の学級担任では対応しきれなかった多様化する生徒の個性や可能性を十分に引き出すことを目的とし、令和 7 年度開設のグローバル探究科で「チーム担任制」を導入するために、メリットやデメリットの整理と、運用にあたっての仕組み作りをする。

(イ)目標達成に向けた取組の振り返り

【取組概要】

チーム担任制のメリット・デメリットを検討し、本校での最適な形を検討した。来年度は次のように実施することを決定した。

学年 240 名を 80 名ずつの 3 つのチームに分け、それぞれをポッドと呼ぶ。各ポッドには 3 名の教員がチーム担任として配置され、各チームを支えるチーム主任がつく。

個人面談はチーム担任がローテーションで年に複数回実施する。また、三者面談では生徒が担当教員を希望することができるようにする。(具体的な方策については検討中)

また、連携・協議を常に行うためには、学年の教員が集まっていることが大切であるが、現在の本校では、教科ごとにばらばらの教官室に机があり、そのような環境にないことから、年次進行で、学年職員室を設けることとした。普通教室を整備していくため、水場がないなど、十分な環境とは言えないが、できる限り居心地の良い居場所となるよう、工夫することを検討している。

【成果】(期待される効果)

生徒が成長するきっかけを「チームワーク」を生かして「より豊かな視点」で創り出す

生徒にこれまでよりも様々なチーム担任の教員が関わるができる特性を生かして、生徒が自分自身を多面的・多角的に見つめることができる

主担任やクラスが固定されておらず、従来学校生活で多くの割合を占めていた「学級の当たり前」が低減し、学校における振る舞いや決断を自分自身で意識的に選択する場面が多くなることで、自己選択と自己決定の機会が豊富になる。

【課題】

先生方から出されたデメリット(懸念点)として、チームで行うことで、分担業務があいまいになり、業務の偏りができるのではないかなどがあげられている。実際に運用しながら都度改善していく。

イ. 次年度への展望

学校の「生徒指導理念」に基づいた「キャリアデザイン」を進路指導部や教育研究部だけでなく、各チーム担任がポッドという生徒、保護者と教員が触れ合う最前線に落とし込む必要がある。

【参考資料】

チームで生徒と伴走する「チーム担任制」の導入

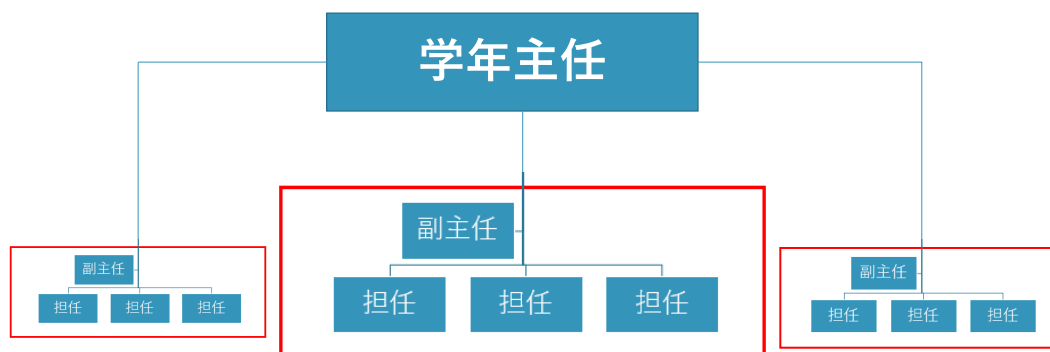
もし、担任の先生が3人いたら・・・？
美鈴が丘高校は「チーム担任制」を導入！

- ✓ 色んな先生に相談できる！
- ✓ 色んな先生の得意なところが学べる！
- ✓ 色んな自分を知ることができる！
- ✓ 生徒の「やってみたい」をチームで応援！



2-6 チームで生徒と伴走する「チーム担任制」の導入

学年主任をトップに、チーム主任＋担任3名のチームが3つある。担任は各ポッドの伴走者として生徒の主体性を高めるような対話を中心とした生徒指導を粘り強く行う。



③ 修学旅行の充実

ア. 令和 6 年度の振り返り

(ア)目標

生徒が、将来、グローバルリーダーとして地域社会の課題を世界的な視野を持って解決していける人材となるよう、海外修学旅行を取り入れることとし、まず、1期生の修学旅行について、行先及び概要を決定する。

(イ)目標達成に向けた取組の振り返り

【取組概要】

グローバル探究科の設置趣旨を踏まえ、海外コースは、海外特有の課題について現地の専門家や同世代の学生と探究するとともに、ホームステイを通じて異なる言語、文化、習慣、宗教を超えて交流することで、異文化コミュニケーション能力を身に付けることをねらいとし、アジア地域の 2 コースを選定した。国内コースは、行先を沖縄とし、地域社会の活性化や観光及び平和について、広島市との比較を通じて探究できるよう設定した。

内容等について、拡大みらい会議で原案を作成し、校務運営会議で決定した。

プロポーザル形式で、取り扱い業者を決定した。

【成果】

次の 3 コースを決定した。(旅程案は別紙参照)

- a インドネシア・バリ
- b オーストラリア・ケアンズ
- c 沖縄

【課題】

旅行費の積み立ての関係で、1 学年の 5 月にはそれぞれの行き先を決定する必要があることから、入学当初から説明会を行う準備をする必要がある。

選択制修学旅行のノウハウを今後蓄積していく。

イ. 次年度への展望

修学旅行に向けた具体的な取り組みの充実を図っていきたい。

a インドネシア・バリ コース

旅行期間:2026年10月18日(日)~10月24日(土) 7日間

参加生徒:40名(引率教員3名)

生徒一人当たりの予算上限:30 万円

【旅程概要】

1日目 広島駅→新大阪空港→シンガポール空港→テンパサール空港→ホテル

2日目 タマン・アユン寺院とエレファントライド1日観光

(バリ島で最も美しい寺院の観光とスマトラ象の背中に乗ってジャングル地帯の大自然を味わう)

Mana ホテルでホテルの取組を学び、宿泊

(ホテル泊)

3日目 アースカンパニー現地プログラム

午前:バリ文化体験

午後:学校交流

(ホテル泊)

4 日目 アースカンパニー現地プログラム

午前:Chop Value(リサイクル箸から家庭やオフィス向けの美しく持続可能な製品の企画・製造を行う循環型経済フランチャイズ)での工場・施設見学ツアー

午後:クレチェン村へ移動

ホームステイファミリーとの交流

(ホームステイ)

5 日目 アースカンパニー現地プログラム

午前:森づくり、循環型キノコ栽培、野菜の水耕栽培などの体験

午後:伝統衣装体験やクレチェン村の文化体験

(ホームステイ)

6日目 午前:ホストファミリーとお別れ

午後:ウブドでの振り返り、空港近くのショッピングモールでの買い物など

テンパサール空港出発

7 日目 シンガポール空港→新大阪駅→関西空港→広島駅到着

b オーストラリア・ケアンズ コース

旅行期間:2026年10月18日(日)~10月25日(日) 8日間

参加生徒:80 名(引率教員5名)

生徒一人当たりの予算上限:40 万円

【旅程概要】

1日目 広島駅→新大阪駅→関西空港(機中泊)

2日目 ケアンズ着

キュランダ村視察

(レインフォレストステーションにてアボリジニ文化体験などの研修)

ホストファミリーと合流

(ホームステイ)

3日目 現地校で学校交流・語学研修

(ホームステイ)

4日目 現地校で学校交流・語学研修

(ホームステイ)

5日目 世界遺産グレート・バリアリーフに浮かぶグリーン島で終日フィールドワーク

(ホームステイ)

6日目 クロコダイルアドベンチャーズ(ケアンズ最大の動物園)見学

ケアンズ街歩き(班別研修)

(ホームステイ)

7日目 終日ホストファミリーと過ごす

(ホームステイ)

8日目 ケアンズ発→関西空港→新大阪駅→広島駅

c 沖縄 コース

旅行期間:2026年12月8日(火)~12月11日(金) 4日間

参加生徒:120名(引率教員6名)

生徒一人当たりの予算上限:15万円

【旅程概要】

1日目 広島空港→那覇空港

平和学習(ひめゆりの塔→沖縄県平和記念資料館)

ホテル泊

2日目 うるま QUEST JOURNEY

(地域で活躍する一人ひとりの物語に触れながら、自分の在り方や未来を探究する教育旅行プログラムに参加。)

万座毛観光

(ホテル泊)

3日目 午前:美ら海水族館見学

午後:JUNGLIA で体験活動

(ホテル泊)

4日目 午前:コース別研修

① 首里城復興コース、国際通り散策

② シーサーづくり体験、お菓子御殿恩納店

③ ビオスの丘(ジャングルクルーズ)、国際通り散策

④ おきなわワールド(玉泉洞、スーパーエイサーショー)

⑤ 齊場御獄(沖縄屈指のパワースポット)、おきなわワールド(お土産店のみ)

⑥ 国際通り散策、ウミカジテラス散策

⑦ ブセナ海中公園(グラスボード・海中展望塔)、国際通り散策

那覇空港→広島空港

(6) 教員と生徒による学校改編検討組織「未来会議」

ア. 令和 6 年度の振り返り

(ア)目標

「未来会議」での活動を通して生徒が主体的に物事を進める経験を積み、自分たちの行動で地域や社会を変えられるという姿勢を育む。

(イ)目標達成に向けた取組の振り返り

【取組概要】

a 様々な学校改革に対する生徒の反応や意見を直接聞く。

チーム担任制や総合的な探究の時間に関する生徒との意見交換



令和 7 年度設置予定「グローバル探究科」の立ち上げに際し、チーム担任制や総合的な探究の時間の増単など様々な改革が行われる。チーム担任制に関しては生徒からは「いろんな先生の価値観に触れられる」「誰に相談してよいかわからなくなる」と賛否両論が出た。また、総合的な探究の時間については、「がちがちにやる内容を決められるとやる気が出ないので生徒が自分で決める裁量がある内容や方法がよい」といった授業改善につながる意見も出た。

b 「未来会議」発の学校全体を巻き込んだ企画を実施する。

① 臨時休校代替日における「気分転換×自己表現×個性表現プロジェクト」の実施



**気分転換
自己決定
個性表現
プロジェクト**

9/21 土
(臨時休校代替日)

変わる気分と自分～更なる個性で気分転換を～

活動内容	当日の取り組み	今後について
自分で着たい服を選択することが出来ます。後飾品も、翌日に元通りにできる場合のみ使用可能です。 ※体育は体操服で行う 制服の場合メイクは禁止とする	気分転換のひとつとして、朝に私達が挨拶運動を行います。積極的な挨拶をよろしくお願いします！	企画終了後にアンケートを実施する予定です。このアンケートを元に次に挙げていきたいと考えています。

広島市立美鈴が丘高等学校
未来会議

企画書はこちら→

企画実施日にあたる 9 月 21 日(土)は臨時休校代替日で、生徒にとっては本来休みの日に学校に来るという「少し憂鬱」な日であることから、未来会議の生徒が企画を提案した。未来会議発案の初めての企画であり、職員会議等で生徒が直接説明を行い教員も巻き込みながら実施した。当日は一部の教員も私服で授業を行った。生徒からは、「先生や友達の新たな一面が見られて楽しかった」という声や「今回は周りの様子を伺って、次回同じ企画があったら私服に挑戦してみたい」といった声が聞かれた。

② 食堂の存続にむけた「食堂利用推進プロジェクト」の実施

物価の高騰等を背景に、食堂の存続が危ぶまれることから、未来会議で何かできないかとの呼びかけがあり、プロジェクトチームを立ち上げた。まず未来会議の有志で食堂の経営者からこれまでの苦労や食堂への思いなどを聞き取り、生徒が取り組めるアイデアを検討した。1年生の教室にポスターを掲示し、プロジェクトチームへの参加を呼びかけた。話し合いの結果、今年度は、生徒向けの食堂メニューのポスターを作成し、各教室に掲示するとともに公式インスタグラムにも掲載して、食堂利用促進を図った。



食堂メニュー 美鈴が丘高校食堂

— MENU —

〈 とりマヨ丼 〉 ※要予約 (3時間目まで)

並	400円
並&増	470円
大	470円
大&増	500円

※ 大 = ご飯増量
増 = 唐揚げ増量

★ お持ち帰りできます！

【成果】

- a 教員側の視点だけでなく生徒側の視点も取り入れることで、生徒の実態や需要に対応した学校改革の推進に役立った。
- b 生徒発の企画を実施する校内プロセスがある程度確立されたこと、生徒が学校の抱える課題を解決したり、理想の学校の実現のために行動したりするという流れが生まれた。

【課題】

- a 今年度は校長を交えた「未来会議」が一度しか実施できなかったが、定期的に生徒から学校改革の状況をヒアリングするために年間4回程度は会議を開催する。
- b 生徒が発案した企画をやって終わりではなく、周囲の声を取り入れながら適切に成果と課題の検証を行い、次回以降の企画を改善・充実させていく。

イ. 次年度への展望

「未来会議」を通して生徒が学校を主体的に変えていくという仕組みを作り、自らが所属するコミュニティの課題を自分ごととして捉える意識を醸成していきたい。その際に対峙する相手を敵と認識してしまうのではなく、共に学校を良くする仲間として協同していてもらいたい。リアルな課題解決の経験から、社会でも役立つ失敗体験や成功体験を積むことを期待している。

(7) 外部評価

【Ai GROW について】

ア. 令和 6 年度の振り返り

(ア)目標

- a 一定の間隔での受検機会を確保する。
- b Ai GROW に特化した職員研修を実施し、教科・部活動・生徒会活動などあらゆる教育活動における評価システムとしての活用を提案する。
- c 生徒の適性や強み、伸ばすべき力などを正確に把握し、きめ細かい学習指導・進路指導に活用する。
- d 生徒自身が自分の強み、伸ばすべき力を認識し、探究活動、学習活動、学校行事、部活動に主体的に取り組み、自己成長を促す。

(イ)目標達成に向けた取組の振り返り

【取組概要】

事前に IGS 株式会社の担当者とオンライン会議で Ai GROW の目的、活用、本校生徒の特徴について打ち合わせを行い、本校主幹教諭が講師となって令和6年5月17日に職員研修を実施した。また、定期考査の時間割に Ai GROW 受検を設定し、1、2年生は4回、3年生は3回の受検を実施した。生徒は受検後のオンライン上の個人レポートにより、自身の強みとともに自身の探究活動や部活動などによってその強みがどのように変化・成長したのかを確認した。

表1に、1、3年生の5月実施と12月実施の結果から算出された9つ資質能力の効果量を示した。

表1 1、3年生の9つの資質・能力の効果量

	情報 収集力	情報 分析力	発信力	自分力	思考力	行動力	調整力	連携力	実践力
1年生	0.06	0.11	0.10	0.09	0.08	0.06	0.09	0.09	0.08
3年生	0.05	0.06	0.13	0.06	0.09	0.03	0.07	0.08	0.05

1、3年生について、9つの資質・能力それぞれの効果量は0.2未満であり、すべての力において本構想における実現する成果目標(アウトカム)で設定した効果量 0.2 以上を達成できなかった。しかし、9つの資質能力の元となっているコンピテンシーは、平均値が上昇し、標準偏差が小さくなっていることから、集団として資質・能力の向上が見受けられる(図1、図2)。

図1 1年生の9つの資質・能力の元となっているコンピテンシーの標準偏差と平均値
(SN-1 小さい●:5月、SN-2 大きい●:12月)

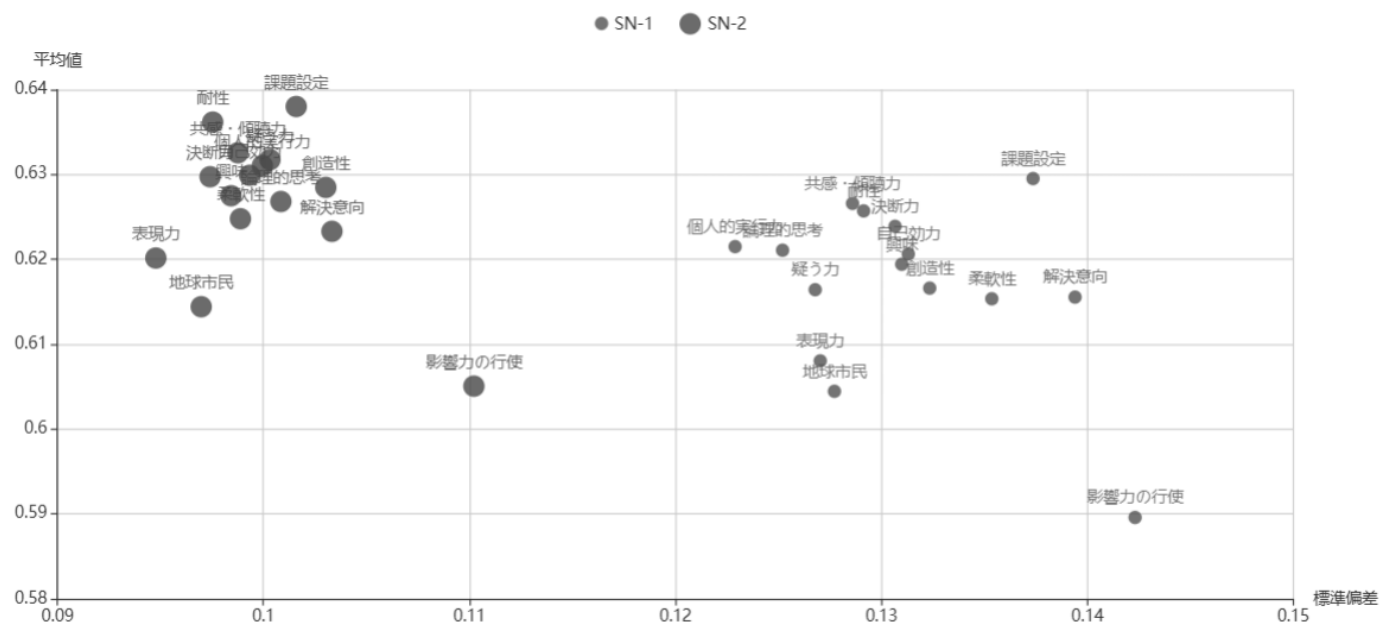


図2 3年生の9つの資質・能力の元となっているコンピテンシーの標準偏差と平均値
(SN-1 小さい●:5月、SN-2 大きい●:12月)

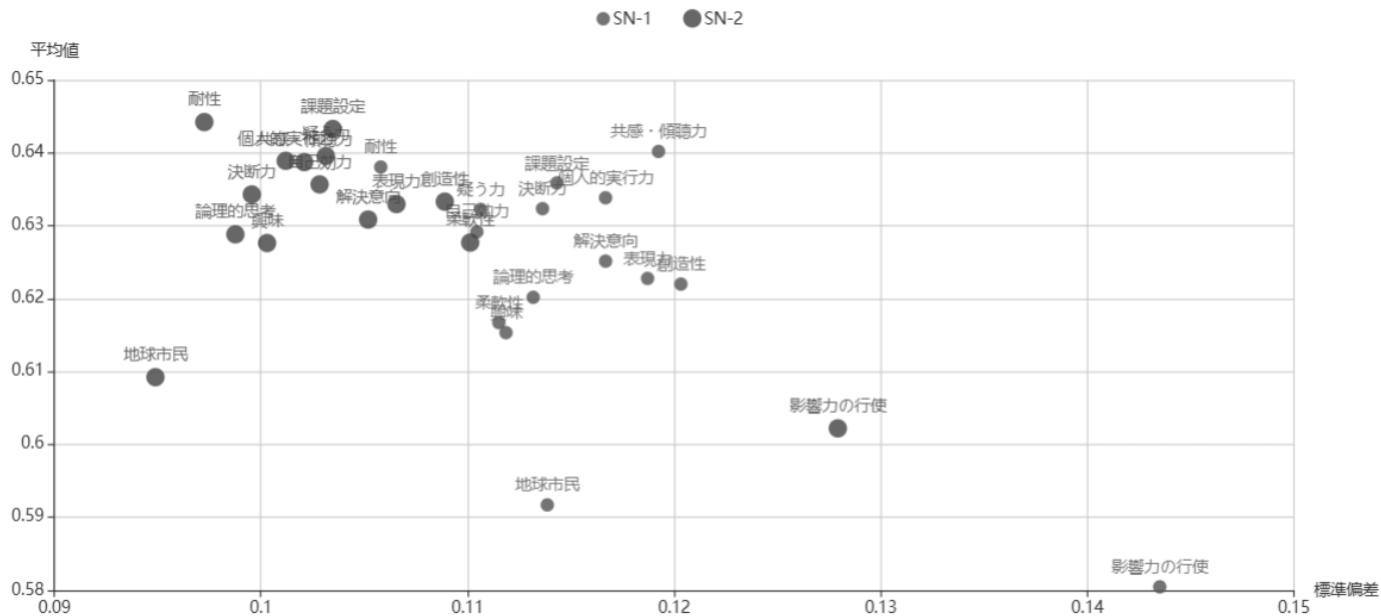


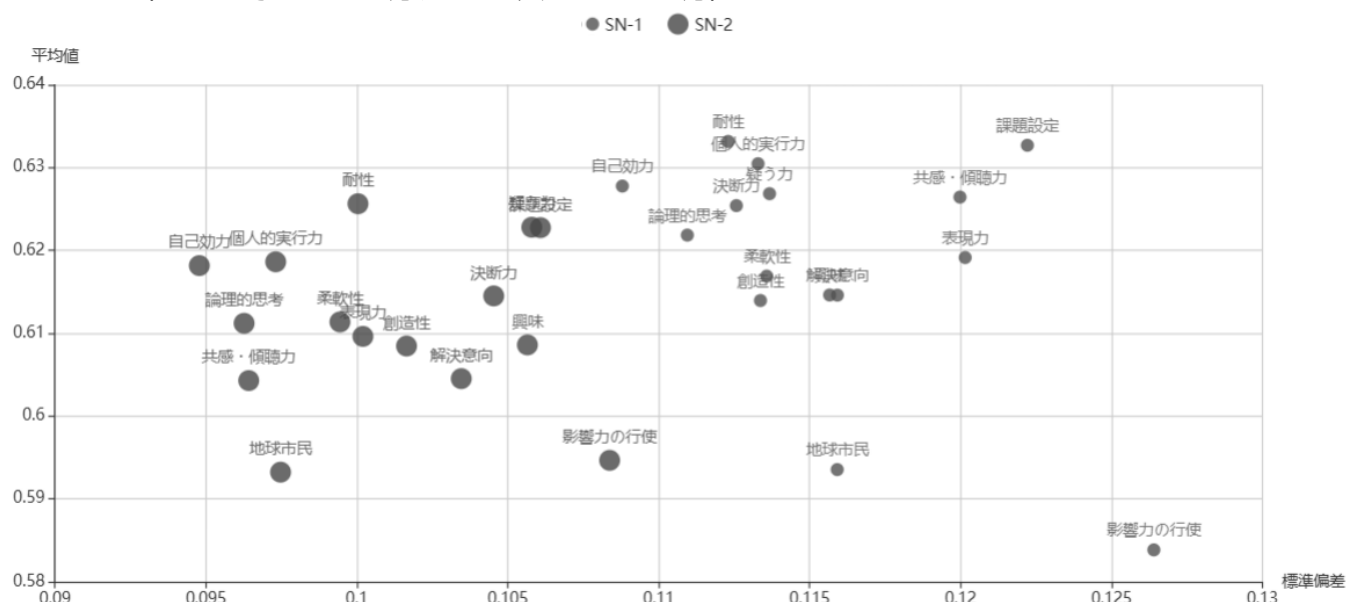
表2に、2年生の5月実施と12月実施の結果から算出された9つ資質能力の効果量を示した。

表2 2年生の9つの資質・能力の効果量

	情報 収集力	情報 分析力	発信力	自省力	思考力	行動力	調整力	連携力	実践力
2年生	0.13↓	0.06	0.04	0.08↓	0.07↓	0.10	0.08	0.05	0.10↓

2年生についても、「情報分析力」、「発信力」、「行動力」、「調整力」、「連携力」のそれぞれの効果量は0.2未満であり、すべての力において本構想における実現する成果目標(アウトカム)で設定した効果量 0.2 以上を達成できなかった。一方で、「情報収集力」、「自省力」、「思考力」、「実践力」については、各資質能力のスコアの減少方向の効果量が算出されている。図3の9つの資質能力の元となっているコンピテンシーについても、平均値が減少していることがわかる。その一方で、標準偏差が小さくなっていることから、集団として資質・能力のばらつきは小さくなっている。

図3 2年生の9つの資質・能力の元となっているコンピテンシーの標準偏差と平均値
(SN-1 小さい●:5月、SN-2 大きい●:12月)



この結果について、IGS 株式会社の担当者と分析を行った。それによると、5月段階でスコアの低かった生徒は12月で上昇傾向にあった。一方で、5月段階でスコアの高かった生徒が12月で減少傾向にあった。これは、生徒の各項目に対する視座が向上し、自己評価においても他者評価においても評価基準が厳しくなり、集団としてスコアの減少につながったと思われる。

【成果】

職員研修を実施したことにより、ペーパーテストでは測ることのできない資質・能力を測定するツールとして教員が認識できた。また、定期考査の時間割に組み込むことで、一定の受検機会を確保できた。一部の教員において、Ai GROW の結果をもとに生徒の強みとそれが培われた具体的な活動等の関連を生徒とともに分析し、大学の総合型選抜における志望理由書の作成や面接指導に活かしていた。また、授業におけるグループ編成についても、『協働的思考力育成を目指した協調性重視のグルーピング』など Ai GROW の分析結果を活用している例もあった。

9つの資質・能力について、その効果量は全学年でいずれも0.2未満だった。また、2年生についてはスコアの減少によるマイナスの効果量が得られた。数値としては、本事業の取組におけるその効果としては前年度に比べ小さいものとなった。しかし、全学年で見られた各資質・能力のスコアの平均値の標準偏差の減少は、自己評価や他者評価に対する各生徒の視座の向上により、各項目の効果量が小さくなったと考えられる。昨年度よりも探究活動において、より外部と連携する中で他者と協同する場面が増え、ホンモノを知ることによって自己の視座を向上させた生徒が多くなったのではないかと分析する。特に2年生については、「生徒による未来会議」の取組の中心学年であり、さらに個人探究におけるチューターや大学・企業の関係者との対話を通じて、「自己の視座の向上」と「もっと自分を磨かなくてはならないという実感」を得た生徒が多いのではないかと考えている。今年度の探究活動の充実と生徒主体の取組の成果といえるのではないかとと思われる。

【課題】

ア(ア)a、dについて、受検機会自体は確保できたが、その結果に関する振り返りを行う機会を確保できなかった。

ア(ア)b、cについて、職員研修を行ったが、活用については一部の教員にとどまった。また、受検結果の共有が十分にできなかった。

イ. 次年度への展望

次年度も Ai GROW を9つの資質・能力の評価・分析ツールとして活用することが決まっている。次年度は、受検を5月と12月に絞り、振り返りの機会を確保する。自己分析をもとに、生徒と教員の個人面談及びそれに保護者を加えた三者懇談において、生徒が自身についてプレゼンテーションする際の項目として活用できるように推進する。また、Ai GROW 受検後に職員研修を実施し、結果と分析の共有を行う。その際に、どの教育活動でどんな資質・能力を特に伸ばさせたいのか、その結果として伸ばはみられたのかを意識する。

さらに、より美鈴が丘高校の育成すべき資質・能力に合致し、かつ学力の三要素の一つである「主体的に学びに向かう態度」の評価ツールとしても活用できる新たな評価ツールを、県立広島大学の向井暁教授、草薙邦広准教授とともに共同開発することを検討している。心理学的な視点を踏まえた汎用性の高いツールの実現を目指したい。

〔参考〕 Ai GROW のスコアの詳細

図4 1年生の9つの資質・能力のコンピテンシースコアの箱ひげ図(左:5月、右太線:12月)

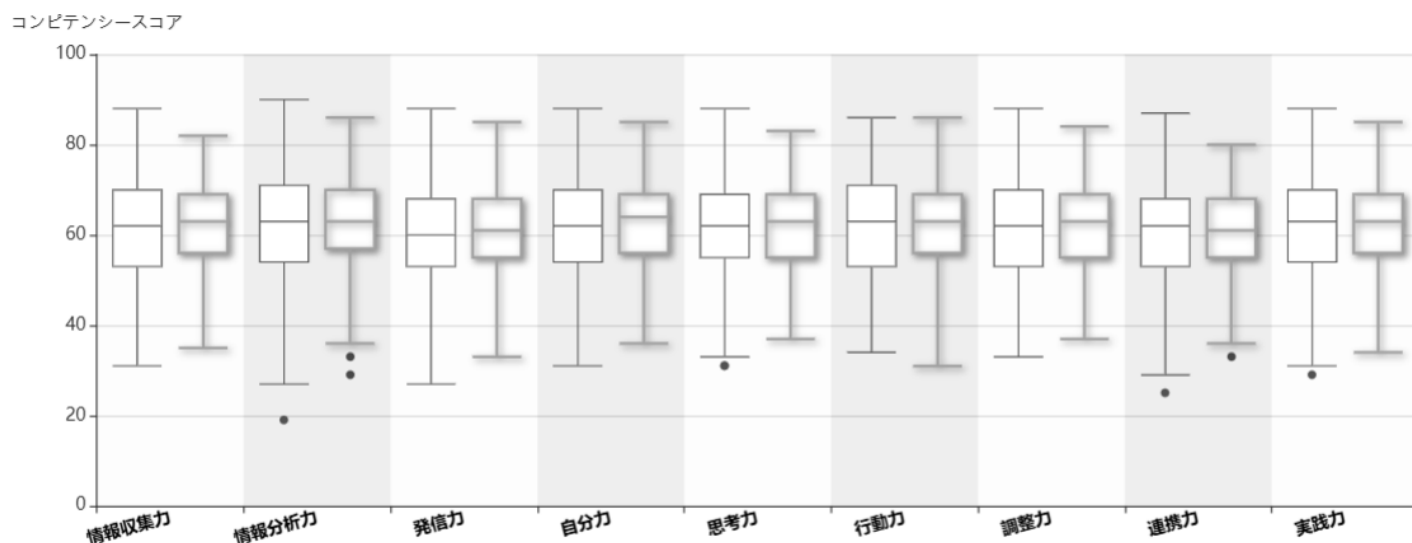


表3 1年生のコンピテンシースコア詳細

1年生	情報収集力		情報分析力		発信力		自分力		思考力		行動力		調整力		連携力		実践力	
	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月
最大値	88	82	90	86	88	85	88	85	88	83	86	86	88	84	87	80	88	85
75%	70	69	71	70	68	68	70	69	69	69	71	69	70	69	68	68	70	69
中央値	62	63	63	63	60	61	62	64	62	63	63	63	62	63	62	61	63	63
25%	53	56	54	57	53	55	54	56	55	55	53	56	53	55	53	55	54	56
最小値	31	35	27	36	27	33	31	36	33	37	34	31	33	37	29	36	31	34
受検者数	241	234	241	234	241	234	241	234	241	234	241	234	241	234	241	234	241	234
平均	62	63	62	63	60	61	62	63	61	62	61	62	61	62	60	61	62	63
標準偏差	11	8	12	9	11	8	11	9	11	9	12	9	11	9	11	9	11	9
効果量	0.06		0.11		0.1		0.09		0.08		0.06		0.09		0.1		0.08	

図5 2年生の9つの資質・能力のコンピテンシースコアの箱ひげ図(左:5月、右太線:12月)

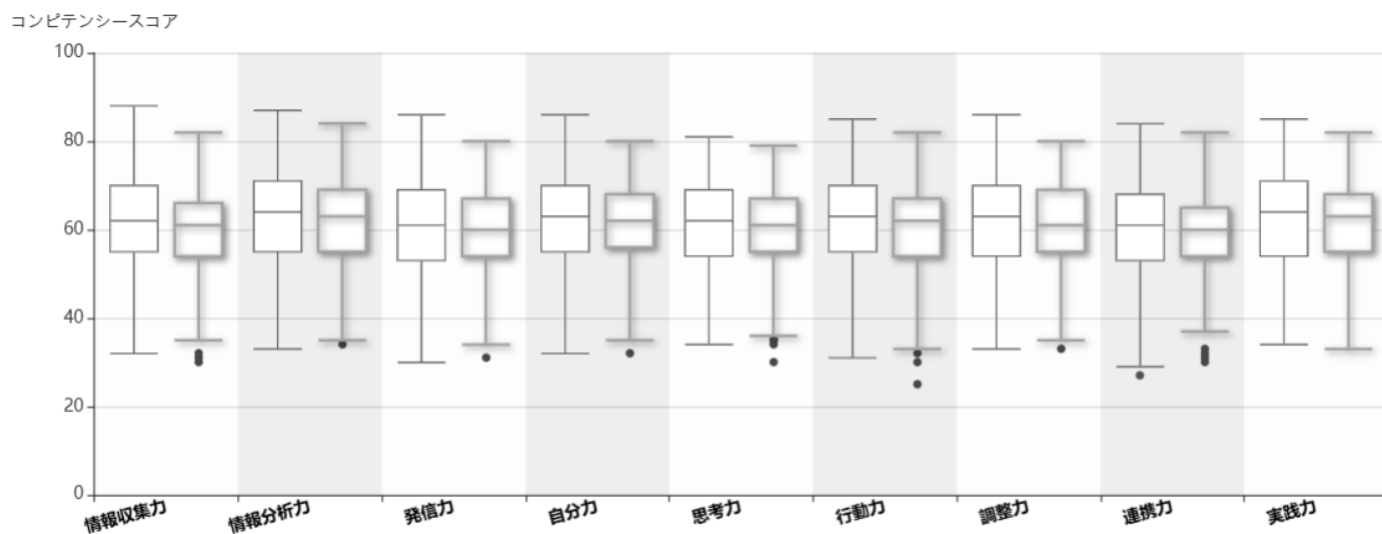


表4 2年生のコンピテンシースコア詳細

2年生	情報収集力		情報分析力		発信力		自省力		思考力		行動力		調整力		連携力		実践力	
	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月
最大値	88	82	87	84	86	80	86	80	81	79	85	82	86	80	84	82	85	82
75%	70	66	71	69	69	67	70	68	69	67	70	67	70	69	68	65	71	68
中央値	62	61	64	63	61	60	63	62	62	61	63	62	63	61	61	60	64	63
25%	55	54	55	55	53	54	55	56	54	55	55	54	54	55	53	54	54	55
最小値	32	35	33	35	30	34	32	35	34	36	31	33	33	35	29	37	34	33
受検者数	233	230	233	230	233	230	233	230	233	230	233	230	233	230	233	230	233	230
平均	62	60	62	62	60	60	63	62	61	60	62	60	62	61	60	59	63	62
標準偏差	10	9	11	10	10	9	10	9	10	9	10	9	10	9	11	9	10	9
効果量	0.13↓		0.06		0.04		0.08↓		0.08↓		0.1		0.08		0.05		0.1↓	

図6 3年生の9つの資質・能力のコンピテンシースコアの箱ひげ図(左:5月、右太線:12月)

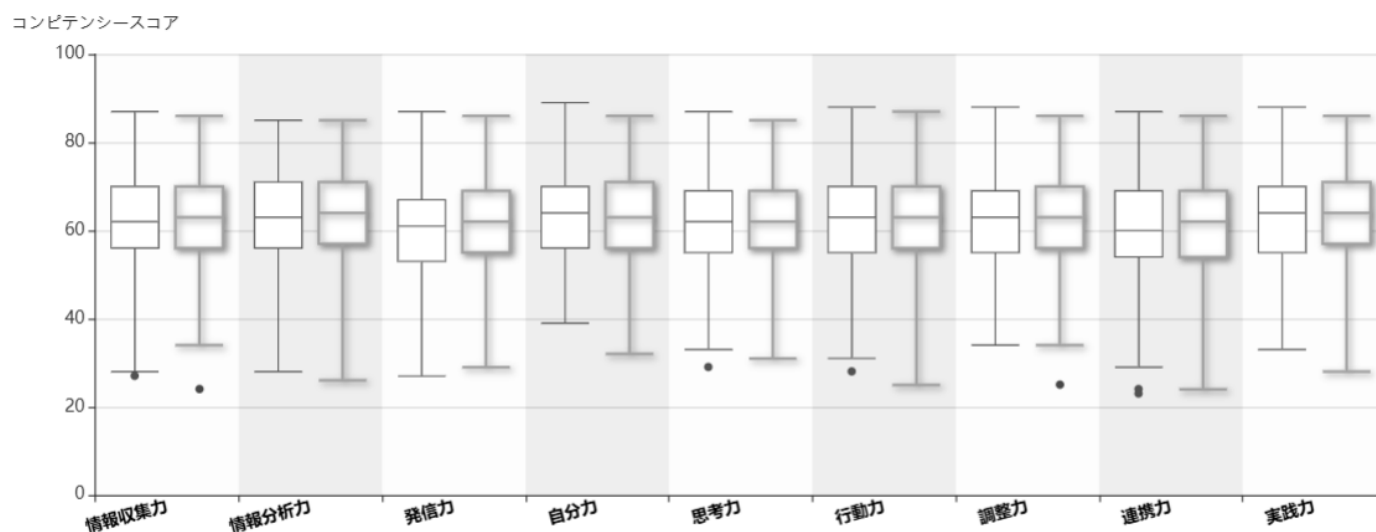


表5 3年生のコンピテンシースコア詳細

3年生	情報収集力		情報分析力		発信力		自省力		思考力		行動力		調整力		連携力		実践力	
	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月
最大値	87	86	85	85	87	86	89	86	87	85	88	87	88	86	87	86	88	86
75%	70	70	71	71	67	69	70	71	69	69	70	70	69	70	69	69	70	71
中央値	62	63	63	64	61	62	64	63	62	62	63	63	63	63	60	62	64	64
25%	56	56	56	57	53	55	56	56	55	56	55	56	55	56	54	54	55	57
最小値	28	34	28	26	27	29	39	32	33	31	31	25	34	34	29	24	33	28
受検者数	222	218	222	218	222	218	222	218	222	218	222	218	222	218	222	218	222	218
平均	62	63	63	64	60	62	63	63	62	63	62	63	62	63	61	62	63	64
標準偏差	10	9	10	9	10	9	10	9	10	9	10	9	10	10	12	10	10	9
効果量	0.05		0.07		0.13		0.06		0.09		0.03		0.07		0.08		0.05	

【高校魅力化アンケートについて】

ア. 令和 6 年度の振り返り

(ア)目標

- a 1年間に2回の実施をする。(今年度は7月と1月に実施)
- b アンケート結果を基に本校生徒の実態把握をする。
- c 生徒の適性や強み、伸ばすべき力などを正確に把握し、きめ細かい学習指導・進路指導に活用する。
- d 生徒自身が自分の強み、伸ばすべき力を認識し、探究活動、学習活動、学校行事、部活動に主体的に取り組み、自己成長を促す。

(イ)目標達成に向けた取組の振り返り

【取組概要】

表6 9つの力と見取る質問項目の対応と結果

資質・能力	質問項目	本校平均 (%)	全 国 平 均 (%)	年 間 推 移 (%)
情報収集力	学校外のいろいろな人に話を聞きに行く。	24.4	35.0	-2.0
情報分析力	授業の内容について、「なぜそうなるのか」と疑問を持って、自分で考えたり調べたりした。	62.0	66.5	+2.3
発信力	活動、学習のまとめを発表する。	63.7	63.7	+6.3
自分力	授業で興味・関心を持った内容について、自主的に調べ物を行った。	59.1	60.9	+6.7
思考力	地域の課題の解決方法について考える。	46.2	51.5	+5.7
行動力	いま住んでいる地域の行事に参加した。	29.2	34.1	+3.8
調整力	失敗してもよいという安全・安心な雰囲気がある。	78.4	81.9	+0.6
連携力	人と違うことが尊重される雰囲気がある	81.3	83.6	+3.8
実践力	勉強したものを実際に応用してみる。	63.7	68.2	+5.1

※年間推移は、本校の2023年平均と2024年平均の推移を比較。

ピックアップ項目

- 生徒の意見が学校での意思決定に反映される雰囲気がある。 67.8→81.3 13.5ポイント上昇
- 地域の人や課題などにじかに触れる機会がある。 52.6→64.8 12.2ポイント上昇
- 自分の暮らす地域を外からの視点で考える機会がある。 49.5→61.7 12.2ポイント上昇
- 将来、自分の今住んでいる地域で働きたいと思う。 45.5→53.3 7.8ポイント上昇
- 住んでいる地域の文化や暮らしの価値ある部分を自らの手で未来に伝えていきたい。 44.1→52.8 8.7ポイント上昇

【成果】

昨年度の結果から、上昇した項目がいくつもあり、本校の特色ある学びに向けての生徒の意識は変わりつつあり、特に上記のピックアップ項目の中にある「生徒の意見が学校での意思決定に反映される雰囲気がある」については、これから生徒自らが学校を作っていくという内容にふさわしい結果となった。

【課題】

アンケート結果から、「情報収集力」に関しては、昨年度に比べて数値が下がっている結果となった。今後、探究学習を推し進めていくうえで、情報収集力は必須項目といっても過言ではない。生徒自らが主体的に取り組むことができるように指導していくうえで、必要な課題となった。

イ. 次年度への展望

高校魅力化アンケートについても、9つの資質・能力の評価・分析ツールとして次年度も継続して活用する。次年度は、生徒による未来会議の取組による提案や各種行事における生徒による企画・運営を本年度以上に発展させ、生徒が主体的かつ大人と協同的に活動する機会を設けることで、さらに9つの資質・能力の向上を目指す。また、情報収集力の向上を目指して、各教科の課題解決の場面で資料やデータの読み取りの機会を設定するとともに、未来計画や総合的な探究の時間の中で、客観性と説得力があるデータの収集について生徒と対話する機会を設けたい。

(8)広報活動

ア. 令和 6 年度の振り返り

(ア)目標

令和7年度設置のグローバル探究科について、広島県内の中学生及びその保護者にその内容が理解され、興味を持たれるよう、本校の取組について周知する。そのため、HP だけでなく、インスタグラムなどの SNS を利用した発信を強化する。また、本校の大きな特徴である、「生徒主体」の広報戦略を実現する。

(イ)目標達成に向けた取組の振り返り

【取組概要】

公式インスタグラムの更新をほぼ毎日行い、行事だけでなく日々の学校生活がよりよく伝わるように工夫した。

YouTube サイトに作成した動画をアップロードして、教育内容をわかりやすく伝えるように工夫した。動画作成に当たっては、卒業生の協力を得た。

広島市教育委員会とも連携し、広島市の広報誌『市民と市政』への新学科についての広報掲載、広島駅・八丁堀・紙屋町地区の19か所に設置された広島市デジタルサイネージでのPR動画の配信、民放テレビの広報番組での新学科についてのPRなどを行った。

また、卒業生の協力を得て、イメージソングを作成した。

広報を担う生徒組織として「広報スタッフ会」を立ち上げ、随時募集を行った。

新学科説明会・オープンスクールの内容を全面的に見直し、生徒が主体的に企画・運営・発信する説明会とした。

塾やNPOや中学校から招聘されて行う出張説明も、原則生徒が参加し主体的に発信した。

【成果】

インスタグラムのフォロワー数が大幅に増加し、情報の拡散力が高まった。

生徒が前面に立ち広報することで、生徒の主体性を大切にする本校の姿勢が大変評価された。新学科の良いイメージ作りにもつながったと思われる。

広報を担う生徒たちも、「やらされ感」は全くなく「楽しかった」と振り返っている。愛校心の醸成にもつながった。

広報スタッフを縦割りで組織することで、継続性を意識することができた。

様々な広報媒体の活用が、広島市内を中心とした中学生やその保護者へのPRの一助となった。

【課題】

インスタグラム等の発信は教員だけでは限界がある。HPでの発信の充実を図るとともに、

生徒が作成する内容も活用するなど、発信の工夫を検討していきたい。

今年度は、活用できる広報媒体を可能な限り試行した感があるが、どのような方法及び手段が有効なのか、来年度入学生にアンケート調査をするなどして、検証する必要がある。

イ.次年度への展望

生徒主体の広報活動について、1期生が主力になっていくと思われるが、現在の在校生との役割分担について慎重に検討していきたい。

2 連携機関等との意見交換・協議

(1) コンソーシアム会議

令和6年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」指定校
美鈴が丘高等学校 第1回 コンソーシアム会議 報告

ア 日時

令和6年6月28日(金)18:30～19:30

イ 会場

美鈴が丘高等学校 プレゼンテーションルーム

ウ 参加者

広島経済大学 胤森教授
広島市立大学 ト部教授
広島工業大学 溝上アドミッションセンター広報参事
広島ドラゴンフライズ 浦代表取締役社長
美鈴が丘公民館 河部館長
美鈴が丘高等学校PTA 織田副会長
ウォンテッドリー(株) 貴船様 (オブザーバー)
ウォンテッドリー(株) 村岡様 (オブザーバー)
広島市立美鈴が丘高等学校生徒会 五十嵐前生徒会長、西畠前生徒会副会長、
川村現生徒会長、波多野現生徒副会長
広島市教育委員会指導第二課 佐々木指導主事
広島市教育委員会指導第二課 島田指導主事
広島市立美鈴が丘高等学校 合田校長、平田事務長、佐々木教頭、沖本主幹教諭、内門教諭、
田中智教諭、菅本教諭、楠香谷高校コーディネーター

計22名

エ 内容

a 校長挨拶

着任挨拶。今後、指導・助言をいただきながら、グローバル探究科のスタートに向けて丁寧に進めていく。

b 生徒発表

- ・グローバル探究科中学生説明資料に基づいたプレゼンテーション
(発表者:五十嵐前生徒会長)
- ・自分の探究活動について紹介(平和に関する探究)・探究活動支援・協力のお願い
(発表者:西畠前生徒会副会長)
- ・発表についての質疑応答

c 各委員の自己紹介

d これまでの検討について確認

e 質疑・応答

胤森委員:広島市の課題を投げ込んでほしい。

菅本:まずは区役所とつながる。型を作る。徒の興味のあることを掘り下げさせたい。

河部委員:美鈴が丘地区、高齢化が進んでいる。公民館を含めて地元を巻き込んだ地域密着型の課題に取り組んでいただきたい。

教頭:いろんな生徒がいろんな探究課題を設定する。いろんな連携をお願いしたい。

菅本:240人が探究活動を行う。

浦委員:探究をしている学校は全国でどれくらいか。

菅本・教頭:県内では初。探究に力を入れている学校はたくさんあるが、本格的にやっているのは珍しい。見た事が無い学校を作りたい。

浦委員:人を増やしたいのか、どうしたいのかが見えてこない。せっかく県で唯一ならブランディングを立てるべき。コンセプトを外から見やすい形であるとサポートしやすくなる。

織田委員:受験は今までと同じなのか。推薦枠など増やす取り組みはあるのか。探究を頑張っている生徒を取れないか。

教頭:特別枠で特徴を出したい。

菅本:全市にパンフレットを配布して広報している。

教頭:生徒主導の説明会がある。生徒が主体になっている姿を見てほしい。

織田委員:中学生はグローバル探究科について理解はどうか。ハードルが高くないか。

菅本:委員の皆様にも口コミで伝えてほしい。RCCラジオ「クジラジ」に出演予定。テレビ出演を目指したい。

胤森委員:特徴的なフレーズがあると良いのでは。平和都市広島を高校生が救う！といったフレーズがほしい。

織田委員:広島は若者の流出率が突出している。

村岡オブザーバー:好きって綺麗でなくてもいいのか。テーマ的に親から怒られそうなものが面白い

菅本:やらされ感の探究は続かない。

貴船オブザーバー:すでに極めている生徒がいれば先に取り上げてもらいたい。

菅本:芸能活動で好きを極めている卒業生がイメージソングを作っている。

貴船オブザーバー:どんな生徒が欲しいのか、ニーズを伝えていくべき。

令和6年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」指定校
美鈴が丘高等学校 第2回 コンソーシアム会議 報告

ア 日時

令和6年11月15日(金)18:30～19:30

イ 会場

美鈴が丘高等学校 プレゼンテーションルーム

ウ 参加者

広島経済大学 胤森教授
広島市立大学 ト部教授
広島工業大学 溝上アドミッションセンター広報参事
佐伯区役所地域起こし推進課 吉村課長
広島ドラゴンフライズ 浦代表取締役社長
美鈴が丘公民館 河部館長
美鈴が丘高等学校PTA 織田副会長
ウォンテッドリー(株) 貴船様 (オブザーバー)
ウォンテッドリー(株) 村岡様 (オブザーバー)
美鈴が丘高等学校 川村生徒会長、波多野生徒会副会長
美鈴が丘高等学校 藏場未来会議委員、藤原未来会議委員
広島市教育委員会指導第二課 福山指導主事
美鈴が丘高等学校 合田校長、佐々木教頭、沖本主幹教諭、内門教諭、田中智教諭、菅本教諭、
楠香谷高校コーディネーター

計21名

エ 内容

a 校長挨拶

- ・生徒が問いを立てて探究していく授業の推進、教員の声掛け(支援)について
- ・「自分で考え、判断し、主体的に行動する」を育成目標として掲げ、これに従って準備を進めていく。

b 生徒発表

- ・生徒会主催の体育祭競技(3年生借り人競争の企画)について
(発表者:川村生徒会長発表)
- ・気分転換×自己決定×個性表現プロジェクトについて
(発表者:波多野生徒会副会長)
- ・未来会議の取組について
(発表者:藤原未来会議委員)
- ・市議会提案発表会～湯来町もっとPRプロジェクトについて
(発表者:藏場未来会議委員、藤原未来会議委員)

c 発表についての質疑応答

貴船オブザーバー: 未来会議制服登校に課題もったきっかけは？

波多野生徒会副会長: 新しい行事を作りたい。忙しい中でもすぐにできそうだった

貴船オブザーバー: 「湯来プロ」の次のアクションは？

藏場未来会議委員: TikTokを作成したい

ト部委員: 湯来南高校との連携で外からの魅力を伝えつつ、内部からの視点を持ってほしい

吉村委員: 他の地域への派生も検討してほしい。

胤森委員: 体育祭の企画など、自分の学校作りを考えていた。高校生として自分の生き方を考えていてよい。美鈴が丘高校生徒としての生き方を考えるきっかけにしてほしい。

湯来町は未来社会創りにどう繋がっているのかをアピールしてほしい

河部委員: 在住者が主役である必要がある。生活体験事業など体験をして、地域と一緒に考えてほしい。オオサンショウウオこんにやくなど作った湯来南高校と連携してほしい。

地域に若い人のエネルギーを注入してほしい。美鈴が丘にも発展してほしい

福山指導主事: 湯来町に小中一貫校を作ろうという動きがある。その場所ならではの学び、カリキュラムが必要。それらにも参画してほしい

浦委員: スラムダンクツアー(中国、台湾からの参加者対象)を検討している。湯来町が舞台になっていることを知らない人が多い。外貨を落としてもらう動きもいいのではないかなと思う。東アジアを中心に世界的に有名になれば、多くの人を呼べる材料になる

d 本校の取組についての進捗状況(内門より)

生徒が主体の活動について、様々な広報を行っている。特に生徒による学校説明が反響あった。1～3年生の全学年が関わることで、継承性を担保できる。生徒による中学校への出前授業・学校紹介を推進している。

カリキュラムマネジメントについて、学校の教育目標を連動させる。生徒が主体性を発揮できる仕組みや機会を創る。

生徒と対話する未来会議について、生徒から意見をもらう企画となっており、生徒は、先進校視察で常識の幅を広げている。

修学旅行について、海外修学旅行を選択できるよう計画している。(英語での交流、探究を通して交流など)

チーム担任制について検討し、生徒を多角的に支援できる体制作りを目指す。

生徒の成長の測定について、アンケート結果で上昇している。

教育課程について、探究を3年間で10単位とし、総時間数を変えずに計画

高校入学者選抜について、学力検査で得意科目を4倍にし、自己表現の割合を上げる特別枠を設ける。

e 質問等

溝上委員: チーム担任制では3人の先生のコミュニケーションはどうとるのか？

内門: 学年職員室の設置を考えている。ICT活用。情報の共有を図る。

織田委員: 一部の生徒がやっているのではないかな？みんなに伝わっているわけではない。

できる生徒しかやっていない印象。ついていけない生徒の支援は？

内門: 今の時点では、生徒の中に核作りを行っている(40名程度)。残り200名はそれぞれの主体性を発揮できる場をこれから作っていく。生徒に対面で語る機会が少ないのが今

後の課題。探究についていけない生徒の支援は、一人一人の対話の時間を増やすための探究単位を増やす。

菅本:核になる生徒が友達等へと広げていく

浦委員:進化を感じている。何人が定員なのか？

内門:240名

浦委員:定員いっぱいになったことをアピール(第3者にしてもらうことが大事)。対話が大事とあるが、交渉力・ディベート力なども奮い立ててほしい。ブランド力を付けてほしい

村岡オブザーバー:1オン1で大事なものは、先生が喋りすぎないこと。考えるにも考え方が重要。考え方を教える授業が必要。湯来町のバスなど、具体的な予算、何人かなど対話から引き出せる

菅本:教員の対話の仕方を研修する必要がある。

胤森委員:対話には種類がある。チーム担任制が機能する仕組みで、対話の二重構造を作れば良い。

ト部委員:新学科はかけにでている。上手くいくか、失敗するかのどちらか。美鈴の探究はまだ弱い。本気の探究が必要。職員室を作り、コミュニケーションの場を作ることも大切であり、教員の関わり方についても、生徒の心に火がつく探究をしてほしい。

ワクワクする探究を徹底してやる必要がある。生徒を調子に乗せる探究を。

美鈴が丘は小中高が揃っている広島市唯一の学校。その特徴を生かすことも検討するとよい。

f 校長挨拶

先生方はとても親切で、どうしても手をかけたくなる。生徒たちがしっかりと考えを深めて、行動に結びつけていく力を引き出していく。彼らの心に火をつけて3年後、すごい学校だと言われるような学校作りをしたい。

令和6年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)指定校
美鈴が丘高等学校 第3回 コンソーシアム会議 報告

ア 日時

令和7年2月14日(金)18:30～19:30

イ 会場

美鈴が丘高等学校プレゼンテーションルーム

ウ 参加者

広島経済大学 胤森教授

広島市立大学 ト部教授

広島工業大学 溝上アドミッションセンター広報参事

広島ドラゴンフライズ 浦代表取締役社長

美鈴が丘公民館 河部館長

美鈴が丘高等学校PTA 織田副会長

ウォンテッドリー(株) 貴船様 (オブザーバー)

ウォンテッドリー(株) 村岡様 (オブザーバー)

美鈴が丘高等学校 藏場未来会議委員、藤原未来会議委員

1年生区役所連携型探究代表 熊谷、高武

広島市教育委員会指導第二課 福山指導主事

美鈴が丘高等学校 合田校長、平田事務長、佐々木教頭、沖本主幹教諭、菅本教諭、

楠香谷高校コーディネーター

計19名

エ 内容

a 校長挨拶

b 生徒発表

・藤原未来会議委員から

未来会議の活動について(食堂存続のための「食堂プロジェクト」の企画・実施)

・藏場未来会議委員から

湯来町活性化プロジェクト(PR動画の作成、マイプロ広島での発表、モデルツアーの企画)

・熊谷・高武1年生代表から

区役所連携型探究について

植物園のフィールドワーク(フォトスポット、体験コーナーを体験し、魅力の発信を研究中)

コイン通りの活性化(高校生に知られていない魅力をどう発信するか研究中)

c 発表についての意見・感想

胤森委員:食堂プロジェクトを盛り上げてほしい。職員や教職員にも取材して、発信を工夫してほしい。湯来プロはパンフだけでなく動画になっているのは良い。植物園は、何を見せるのか吟味してほしい。コイン通りは、自分たちの手応えを大事にしてほしい

ト部委員：向こう側に突き抜けるほど調子に乗ってほしい。面白いことにチャレンジしてほしい。探究は正解がないからもっと楽しんでほしい。湯来プロについては、湯来町の匂いを伝えてほしい。あぶが多いがおいしくアイスクリームが食べられるか、フマキラーと連携するとよい。コイン通りは、お金をとことん考えてほしい。お金とはなに？ということを考えて、伝えてほしい。植物園は、入試問題に出てくる科学実験を実践してみると中高生が来るかも。食堂プロジェクトは、どういう人が利用して、どんなものを食べているのかを調査する。何円だったら食べるかなど。

浦委員：食堂はぜひ死守していただきたい。学生食堂だから値段が上げられないと思うが、夜の食堂で「こども食堂」実施とか、近所のスーパーフレスタの廃棄を受け取るなど、色々なアイデアを考えてほしい。地域や企業を巻き込んで考えてほしい。コスト削減を検討してほしい。

d 本校の進捗状況について(内門委員から)

- ・生徒指導理念と本校の教育方針について
- ・区役所連携型探究について
- ・提案
 - コンソーシアム連携型地域探究としたい
 - いただいた課題と生徒の興味・関心のあるマッチングを図りたい

e 意見・感想・質疑応答

織田委員：現2・3年生の探究をどう引き出していくのか、1年生は学校から課題を与えていくというのを続けるのか、進め方がよくわからない。

菅本：1年生では、探究の型を身に付けさせるのが目的なので、ある程度選択肢を与え、グループで深める活動をし、2年生、3年生になってから、個人探究を行う。そのため、1年生の探究活動は、1年生の3月で一旦帰着させる。

河部委員：今回1年生のグループ探究のために、鬼が城山登山など、地域の方を紹介し、とても良かったと地域の方から聞いているが、地域の方は期待が高いため、今回で終わりとなると、「発展を期待したのに何だったのか？」とならないか、心配している。

菅本：グループ探究は一旦帰着するが、2年生になって引き続き探究をしたい生徒が出るかもしれないし、そこはこれで終わりというつもりはないので、引き続き協力をしてほしい。

ト部委員：高校生の育成のために協力しているのだから、期待を高めるのは良いが、あくまで協力していくことが大切であることを理解する必要がある。

貴船オブザーバー：地域の方々と高校生との間の取り次ぎに障害があるようであれば、それは、コーディネーターさんが調整すればよい。

溝上委員：探究活動以外の一般の授業はどうなるのか。

校長：一般の授業でも、生徒が主体性を持って考えることを大切にする授業を進めていきたい。

ト部委員：様々な探究活動の発表を見てきているが、優秀な高校と言われる学校の発表が「テンプレ化」しているのを感じる。型が決まった結論が出てきて、生成AIに質問すればもっと良い答えが出てくるのではないかというような内容が多くなってきているように感じる。少しゆるく進める方が良いのではないかと考えている。

村岡オブザーバー：少し過激な発言かもしれないが、1年生のうちは、立ち直れる程度でよいので失敗をしてほしい。学校の先生方は、生徒が失敗しないように手をかける傾向があるように思うので、特に1年生のうちは、思うようにやらせてあげればよいと思う。

校長：全く過激な発言ではない。私も失敗することは、大切な過程だと思っている。どんどん失敗して、そこから学んでほしい。確かに先生方は、生徒が失敗しないように指導しようとする傾向があるので、そこは先生方に理解を求めながら進めたい。

胤森委員：1年生の探究にしても、「与えられたもの」ではなく、「求められているもの」を探究しているので、とても良いと思う。探究したことを、地域にもっと広めた方が良いので、定期的に「美高ジャーナル」のようなものを出して、発表したらよいのではないかな。

貴船オブザーバー：地域連携型とコンソーシアム連携型の違いは何だろうか？地域連携型を進めながら、必要に応じて、企業等に広げていけばよいのではないかな。

浦委員：自分は選手の引退後の保障も重視しているが、選手がビジネスマナーやビジネスリテラシーを学んでいないまま入ってくるため、ビジネスの基礎が全くできていないと、せっかく引退後に職を得ても、転・退職してしまうことが多いように感じている。自分の場合は「優秀なビジネスマンを育てる」ことを重視しているが、どちらにしても、基礎的に大切なことを全員が理解し身に付けて、個々の探究活動ができるとよいと思う。

ト部先生：他校での教員研修でも何度も言ってきたことだが、探究活動における先生の役割は、「何それ？」「何故？」「ホンマか？」の3つを常に問うことだ。そして、3つによく答えられるようになれば、「だから何？」と問うとよい。それ以外は、何もせず、先生たちが常に問いを立てるのを楽しめるようになるとよい。

f 校長挨拶

生徒の発表活動に対して、様々な視点から貴重な助言をいただいた。感謝したい。見方・考え方の幅を持つことの重要性が十分に認識できた。また問いの編集力の大切さもひしひしと伝わってきた。ここにいらっしゃる皆様のような「ホンモノ」に触れる体験・経験を持つことにより、生徒が自らを突き動かすような問いを携えて進んでいくことを本校の柱としたい。今後も御指導と御助言をお願いしたい。

(2)運営指導委員会

令和6年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」指定校
美鈴が丘高等学校 第1回 運営指導委員会 報告

ア 日時

令和6年8月9日(金)9:00～11:30

イ 会場

美鈴が丘高等学校 プレゼンテーションルーム

ウ 参加者

広島市教育委員会学校教育部 星野指導担当部長(座長)

広島県公立大学法人叡啓大学 保井学部長・教授(オンライン参加)

広島県公立大学法人県立広島大学 向居教授

広島市立大学 元美鈴が丘高等学校長 柳先生

広島市教育委員会学校教育部指導第二課 長屋課長、檜垣課長補佐、福山指導主事

広島市立美鈴が丘高等学校 合田校長、佐々木教頭、沖本主幹教諭、内門教諭、田中教諭 計12名

エ 内容

(ア) 挨拶

香山委員:持続的に探究を続けることができる仕組みづくりについても考えて欲しい。その上で、学校運営協議会(コミュニティスクール)の枠組みを活用することは効果的ではないかと考えている。

(イ) 報告

香山委員:探究中心のカリキュラムに一気に振り切った感がある。海外にはもっと探究に振り切ったところもある(アメリカの公立高校ハイテックハイ <https://www.sensei-nogakkou.com/article/sp0009/>)。探究を活かした進路実現の方向性は理解できる。ただし、教育課程をアピールする上で、総合型選抜のみで大学入試を受検するという誤った判断がされないように、一般選抜でもいけるという配慮が必要だと考える。

向居委員:日本の入試制度には壁があると思う。今や年内入試が全大学入学者の半分以上となっている現状がある。県立大学でも総合型選抜を実施しており、総合問題を実施しているが、当初は身内からも反対意見が多かった。今は受検者が増えている現状がある。これは社会の受け止めの問題だろう。しかし、学力も勿論大事である。一般選抜と総合型選抜で求められる力を分離することはできない。

香山委員：単元配列表について言及があったが、他の学校の先生に「そこまで考えているのか」と思わせる、カリキュラム上のしかけが必要だと感じる。

向居委員：教科の探究、教科のつながりが重要だと思う。地域に出たの探究も大切だが、教科横断は先生方の専門分野で、大学の学びにも直結するものである。また、前の運営指導委員会でも伝えたが、フィールドワークは必要に応じてやるべきだと感じる。文献研究は大切なプロセスで、こういった調査の練習をさせてもいいのではないかな。

星野委員：義務教育段階の平和学習も年間3時間程度であり、あまり時間をさけていない実情がある。この時間の中で平和教育を実施するには、他教科との連動が必須であり、単元を繋いだ平和に関する取組がなされている。こういった取組と同じようなイメージで進めて行けばいいのではないかな。

柳委員：高校入試の特色枠で入学してきた「とがった生徒」同士が、協働して学べるようになることが理想だと思う。また、チーム担任制においては職員の待機する教室が必須だと考えており、若い教員がOJTで育つ上でもいいのではないかと考えている。

香山委員：職員室をフリーアドレスにしてもいいのではないかなと思う。多様な教科の専門性を持った先生方が探究について自由に話ができる環境によって、先生方の探究マインドが醸成されるのではないかなと感じる。また、授業にはパフォーマンス課題を導入することで授業の中に探究を組み込む仕掛けができるのではないかな。愛知県のある高校の物理基礎の実践で、単元のはじめにパフォーマンス課題を組み込む実践があった。このような取組を行うと先生方も、授業も変わってくると思われる。

柳委員：探究のまとめかたのフォーマットがあってもいいのではないかなと思う。特に探究的な活動が苦手な子には、気軽に聞いてもいいよという先生方の支援の姿勢も大切だろう。

向居委員：大学で学会提出する際の、研究論文フォーマットが存在する。学会によって仕様が若干違うが、大きな枠組みは変わらないと思う。そういったものを高校用に転用して使うことも考えられるのではないかな。保井委員の研究分野ではどうだろうか。

保井委員：学会によって仕様は異なるが、大枠は変わらないと思う。向居委員がおっしゃられることはその通りである。

星野委員：チーム担任制にはメリットとデメリットがあると感じる。チームの思いとは裏腹に、生徒の中には、誰に、どの担任に相談すればいいかわからないという層が一定数いる。相談のパターンを期日を切って変えていくことも考えられる。また、子ども達から学校や先生方を変えるようなしくみがつくれるといいと感じる。

向居委員：修学旅行については、先ほどのフィールドワークとも重なるが、行かなくてもわかることと、行かないとわからないことを明確にして行くと良いと思う。

香山委員：先生方は大学で探究について専門的に学んでいるわけではないため、苦手としている方も多いと思う。だからこそ、先生方は伴走者として、プロボノメンター（社会人メンター）をコーディネーターが連れて来てつなげてほしい。これで先生方も助かるはずで、窓口だけで終わらないような支援をしてほしい。

向居委員: Ai-Grow の伸びについては、どこかと比較しないと見えてこないだろう。美鈴の探究で伸びているのか、一般的な普通科高校ではどこでもそうなのか、比較対象を考えた方が良いだろう。

保井委員: 資質能力の評価は、比較対象と有意な差があるかどうか見ていくと良いだろう。

香山委員: 評価については向居委員のおっしゃる通りだが、校内的には生徒の成長を保護者に実感させていくような取組を考えて欲しい。三者懇談の際に、3～5分のプレゼンをラーニングミーティングなどといった名前を付けて実施してもいいだろう。ポートフォリオのような成長の記録があってもよいと思う。

地域課題探究については、多くの先進校で実施されているが、生徒自身がやりたいことと矛盾することが出てくる。また、先生や地域から言われすぎると押し付けになる。こういった事例をもとにして、良いものを検討して欲しい。

挨拶でも言ったが、現在美鈴が丘高校には、学校運営協議会(コミュニティスクール) とコンソーシアム会議が併存している状況であり、国の指定終了後を見据えてコンソーシアム機能を学校運営協議会に組み込むようなことを考えてもいいと思う。学校運営協議会が地域社会と繋がり、プロボノメンター(社会人メンター)を連れてくるような仕組みを是非作って欲しい。

香山委員: 探究発表会の次なる進化を見据えて、ポスターセッションができる環境を是非整えて欲しい。A0プリンターでポスター印刷し、パーテーション(ついたて)に掲示して発表するなどが考えられる。

向居委員: A0プリンターは、紙とインク代が結構高いのでランニングコストも考えて欲しい。

保井委員: ポスターセッションでA0やA1で印刷するのもいいが、発表をこまめにやろうと思うと高くつくので、模造紙やイーゼルパッド、可動式のホワイトボード等に大量のポストイットを張ったり、フロッキーペンでその場で書くことなども考えられるのではないかな。大学でも重宝しており、学生一人につき、600枚くらいポストイットは必要となる。

(ウ) 事後連絡

向居委員: こちらとしても高大連携については推進していきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。連絡お待ちしております。そのほかの細かいことについても、遠慮なく。あと、AiGrow について予算がなくなれば、終了するという話がありましたが、生徒の成長を検証するには、やはり何らかの定量的な指標が必要だと思います。昨年度もお話したのですが、測定されているものは汎用的技能やジェネリックスキルと呼ばれているものや 社会情動的コンピテンシー(非認知能力)と称されるものでして、後者については大体は既存の心理学分野で開発され心理学研究で用いられる尺度で測定可能です。ただ、前者の汎用的技能については、おそらく尺度が開発されていないと思います。で、考えたのですが、あと半年と1年あれば、高校生用の汎用的技能尺度が開発可能ではないかとも思っています。手前みそになりますが、大学生用については開発の経験があります。紀要論文を添付しておきます(あと4つぐらい関連研究があります)。多少、大掛かりな調査が必要になりますし、先生方のご協力が必要になりますが、基本的には美鈴が丘の生徒を対象にして、作成が可能かと思われます。また、汎用可能性が高い内容になりますので、先生方も著者

としてかわりながら研究発表や論文文化も可能です。質問紙等の作成や分析はこちらでします。先生方にご協力をお願いするのは、高校生も理解できるような項目の改編や生徒への調査協力の依頼になるかと思います。もしご興味があれば、詳しく説明したいと思いますので、またお伝えください。

柳 委 員：お世話になりました。昨年度よりも生徒たちが動いてる状況が生まれてきていることが美鈴が丘高校の先生方の反応に良い効果を生み出すことに繋がってきているのですね。
合田校長先生が生徒たちを信じて先生方とともに取り組まれていることに感謝しているところです。指導第二課の皆様には昨年度に引き続き、事務的なことや文科や市教委との調整など大変な役割を担っていただき、新学科スタートが、希望と期待に満ちた生徒により迎えられようにご支援いただきますようお願い申し上げます。退職後もこのような形で関わることが出来て、有り難く感じおります。

香山委員：市教委の強力なバックアップのおかげもあり、熱気を帯びてきてますね！私自身、協同と探究をキーワードに教育実践をして参りましたので、美鈴が丘高校の未来がとても楽しみです。
本日、時間の関係もあり貴兄の説明に言及しませんでした。今回、コーディネーターを臨時的任用教諭で採用するのは特筆に値する施策です。有能なコーディネート人材にはそれなりの待遇が必要ですが、現実には実現できていないところが多々あります。
市の有効な教育施策と学校現場の本気が融合すれば、大きな化学変化が起きると確信しております。

令和6年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」指定校
美鈴が丘高等学校 第2回 運営指導委員会 報告

ア 日 時

令和6年12月2日(月)9:00～11:30

イ 会 場

美鈴が丘高等学校 プレゼンテーションルーム

ウ 参加者

広島市教育委員会学校教育部 星野指導担当部長(座長)

広島県公立大学法人県立広島大学 向居教授

広島経済大学 胤森教授

岡山県青少年教育センター閑谷学校 香山所長

広島市立大学 元美鈴が丘高等学校長 柳先生

広島市教育委員会学校教育部指導第二課 長屋課長、檜垣課長補佐、福山指導主事

広島市立美鈴が丘高等学校 合田校長、佐々木教頭、沖本主幹教諭、内門教諭、菅本教諭、田中教諭、楠香谷コーディネーター 計15名

エ 内 容

(ア) 生徒主体の学校運営について

星野委員:1日私服登校の取組の際に、メイクについて校内でどのような議論があったのか。

菅本委員:生徒側は自己表現の一つとして捉えたが、教師側では学校教育に不要であることや地域住民の理解の問題等が話題となり、折り合いをつけることが難しかった。今回は一日だけであったため校長先生に実施を決めてもらったが、今後の校則改訂の議論ではどのように折り合いをつけていくかが課題となる。

香山委員:未来会議の取組は素晴らしいものだが、教師側が過度にブレーキをかけると「生徒主体」という言葉が口先だけとなり、ダブルスタンダードと認識される可能性がある。学校が生徒との信頼関係を深めるため、意思決定のプロセスに民主主義を取り入れると良い。また、地域の理解については学校外の組織とどう話をして協力していけるかが鍵だ。

(イ) 事業効果検証について

香山委員:様々な取組の評価を多様な形でされていると思うが、私服登校に対する生徒や保護者、地域の方々の感想をインタビューレビューとしてホームページにアップするなど、校内で行われている取組を透明化すると良い。また、探究と教科学力の評価をクロス分析し、相関データ等を中学生、保護者、塾等に示してアピールすることも考えられる。過去に、「総合的な学習の時間」を導

入した際、PISA2015 のスコアが落ちたと言われたことがあったが、全国学調の学力との相関を示したことで重要性が認識され探究の推進が加速した経緯がある。美鈴の取組をアピールするチャンスである。

合田校長：探究を中心としたカリキュラムについては教職員に少しずつ浸透している状況である。一方で、先日のコンソーシアム会議にて保護者の方から探究に主体的に参加できる生徒は一部ではないか、全生徒が頑張っているのか、といった懸念をいただいた。学校運営協議会でも、地域の方から校則改訂について、やはり制服は着させるべきだ、との意見もいただいた。保護者や地域ともしっかりと話をしていかなければいけない。

胤森委員：普通科高校は特に大学受験にカリキュラムがからめとられていることが多い。今一度、教育基本法の理念である、人格の完成や平和で民主的な国家や社会の形成者に立ち返って、大きい所から地域や保護者にも説明できるように整理してはどうか。また、難しいとされている「主体的に学習に取り組む態度」の評価に着手されている。見通しをもち自己調整することや粘り強く取り組むことの2つの側面を上手く評価することができれば、公立学校としてどこに出しても恥ずかしくないアピールができる。

(ウ) 教育環境整備について

香山委員：ホームページが時代遅れである。レスポンシブデザイン(※)としてアップデートするべきである。また、グローバル探究としているのだから英文のページも必要だ。

※ どんな大きさの画面でも見やすく、使いやすい Web サイトにすること。1 つの HTML で配信し、CSS (情報の大きさや位置など表示の指定)はデバイス(PC、スマホ等)ごとに用意して表示を変える。

胤森委員：地域とつながりあう場が校内にあると良い。小中高大と関わっているが、高校は地域と分断されている。高校内に外部とつながれるフィールドがあれば探究も充実する。

(エ) カリキュラム開発等について

向居委員：目標をどこに設定するかで、何を使って評価するかが決まる。学術的には、例えばレジリエンスには先天的な因子が効いているといったデータがあり、意外と教育界で大事だと思われるものが先天的因子に起因することがわかっている。そういった中で、「主体的に学習に取り組む態度」というわかりにくい力を、学術的に分解して評価指標をつくることには意味があり、他校でも使ってもらえるものになればと考えている。探究で力を付けるのが目標なのか、学力を付けるのが目標なのか、大学入試なのか、大学での研究で役立つ力なのか、それらの目標の設定によって、どのように評価するのが決まる。また、探究は方法論が大切で、頑張っただけでは力がつかない。区役所に行って、インタビューするのはわかるが、何のためにやっているのか考えさせることが必要だ。インタビューしなくてもわかるようなことをやっていることもある。探究の方法をしっかり押さえれば質が上がるはずである。

菅本教諭：学校、特に高校は地域や社会との関係が希薄で、学校内だけの学びでは限界があると感じている。学びを地域社会とつなげていくのは大切な取組だと捉えている。個人的には、探究はウェルビーイングと呼ばれるような幸福感を実現するために課題を自分なりに工夫して解決し

ていく学びだと捉えている。そのためには教科学力との連動も必要だと感じる。探究の方法論については、まだ各校バラバラで体系化されていないと感じる。

向居委員：目標は具体的に生徒や保護者、地域に伝えていかないといけない。ウェルビーイングならそれとしてしっかりと学校はこれに取り組みますと明確に発信すべきだ。また、探究の方法は、やはり研究の方法を参考にするべきだと感じる。心理学は方法論にとっても細かいので、中途半端な方法では「頑張っただけ」という評価になってしまう恐れがある。学際的な何か点と点を結びつけるような探究がいいのではないか。視野を狭めすぎず、新しいものをつくる創造的な取組であれば良いと感じる。

香山委員：新しい普通科について、普通科を残して設置する学校が多い中、定員 240 人すべてを新しい普通科として行うのはチャレンジングで素晴らしい。探究は「這いずり回る経験主義（※）」と批判されることがある。原理をつかみ、転移可能な知見を得ることができる本質的な学びに結び付けていくためには、教師が専門家と接続する、専門家をコーディネーターが発掘してくる、学力との関係をクロス分析することなどが必要である。

※ 体験的、経験的な学びでは、断片的な知識しか身につかず、学問を体系的に学ぶことや専門的に学ぶことがおろそかになるのではないかと、また、体験することが目的化してしまい、本来身に付けるべき知識が身につかないのではないかと、という批判で、進歩主義教育の根底にあるデューイの経験主義 哲学に絡めて「這い回る経験主義」と批判されることがある。

探究を一部の生徒の学びとしないためにはいくつかのしかけが必要だろう。例えば、一枚ポートフォリオを取り入れて生徒の成長を見取り、それを積み上げて三者懇談で生徒自身が成果を保護者に発表・説明するなどが考えられる。

柳委員：在職時に、学校として育成を目指す9つの力を掲げ、それに基づくルーブリックを作成した。今は私自身大学で学ぶ中で、生徒の学びを限定する枠組みを作りすぎることは危険性もはらんでいると感じ始めている。学校として「どういう人になって欲しい」のか、そしてそれを学校がどう支えるのか考え続けることが必要である。生徒と教師に「私たちはこうなっていくんだ」という共通認識があり、それらを自己開示してお互いが受け入れていく環境があれば良い。

探究が一部の生徒のものになる、という意見もあるが、探究により生徒個人の立ち位置が変化していくことは魅力的な取組だ。成長した生徒に刺激を受けて後から開花する生徒もいる。今後、大学生が高校に来て探究のファシリテートができるような連携ができればよいと考えている。

胤森委員：探究の方法をしっかりと身に付けさせるために、なぜその方法を用いるのか、その都度生徒に伝える必要がある。教員側も常に問い続ける必要があり、例えば「学びのハンドルを預ける」のは何のためなのかを問い、生徒達に伝えるなど行うと良い。大学全入時代にあって、自律して学ぶ人間を育成するために、研究者の卵としての探究に自身の生き方や在り方を摸索させて取り組む中で、同時に探究の作法も身に付ける、これらを美鈴で保障するために「学びのハンドルを預ける」といった整理などができるかもしれない。

チーム担任制については、生徒指導の三要素（※）を重層的に組み込んだ先進的な取組になるだろう。

※ 生徒指導の三要素とは、生徒一人一人の人格を尊重しながら、個性の伸長、社会的資質と行動力を高め、自己実現に向けて取組みを促すことである。

(オ) 全体を通して

香山委員:「グローバル探究科」という名称が先行すると、「それは何?」となるため、「やりたいことをとことんやれる新しい普通科」、それがグローバル探究科なんだ、といった打ち出し方がいいのではないか。

文部科学省が定義したウェルビーイング(※)には、獲得要素と協調要素の2つの側面がある。自分がやりたいことをやることで獲得要素は得ることができるが、協調要素は、探究を進める中で、誰かのための取組、チームワーク、社会貢献などで得ることができる。チーム担任制や探究を運営していくため、ミーティングによる意思疎通の時間が必要だと感ずるので計画をお願いしたい。

授業改善を学校全体で取り組む上で、毎時間の授業でなくても単元計画のなかで改善を図っていくのが良い。理想的には単元配列表等を作成して学校全体の学びをデザインできれば素晴らしいし、適切な事前学習課題の提供により生徒もパンクしなくて済む。生徒の家庭学習量等をコントロールしてやることも大切である。

※ ウェルビーイングには個人が達成・獲得する能力や状態に基づく獲得的要素と、人との関わりや関係性に基づく協調的要素があるとされている。欧米諸国では、「自分ならできる」と信じる力があることや自尊感情が重視されるが、日本では、学校や地域との繋がり・社会貢献意識など、人との関係性に基づく要素をより重視している。この両者を調和的・一体的に育む「調和と協調に基づくウェルビーイング」として、日本社会に根差したウェルビーイングの実現を目指しており、この考え方は G7 教育大臣会合でも発信して成果文書に盛り込まれた。

胤森委員:昨年度、単元配列表として総合的な探究の時間の年間指導計画の別葉を作成した実績がある。こういったものを更に発展させてもらえればいいのではないか。

向居委員:ウェルビーイングは、ある行動に対して付随する感情だと思う。これを目的化することは難しいのではないか。心理学的には幸福度の指標は30程度ありやりすぎの感がある。とにかく、新しいことをするときには、子どもたちに何のために何をやるのかははっきりと理解してもらってやることだ。

また、ここまでの説明を聞いてグローバルの要素が弱いように感ずる。大学では、「地域はすでにグローバルだ」という認識になってきている。お金集めや人集めではなく、教育的にお互いに世界的視野をどう作っていくか、生徒たちが一歩進んで考えていくな取り組みを考えていただきたい。

令和6年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」指定校
美鈴が丘高等学校 第3回 運営指導委員会 報告

ア 日時

令和7年3月14日(金)14:00～16:00

イ 会場

美鈴が丘高等学校 プレゼンテーションルーム

ウ 参加者

広島市教育委員会学校教育部 星野指導担当部長(座長)

広島県公立大学法人県立広島大学 向居教授

広島経済大学 胤森教授

岡山県青少年教育センター閑谷学校 香山所長

広島市立大学 元美鈴が丘高等学校長 柳先生

広島市教育委員会学校教育部指導第二課 長屋課長、檜垣課長補佐、福山指導主事

広島市立美鈴が丘高等学校 合田校長、佐々木教頭、沖本主幹教諭、内門教諭、菅本教諭、田中教諭、楠香谷コーディネーター 計15名

エ 内容

(ア) 「グローバル探究科」カリキュラム開発等の状況

(イ) コンソーシアム会議との連携及び高校コーディネーターの配置について

(ウ) 生徒が主体的に取り組む学校運営(未来会議・チーム担任制等)について

(エ) 事業成果検証及び入学者選抜結果等について

(オ) 来年度予算及び支援等について

3 参考資料

令和6年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業実施計画書」

実施計画書（普通科改革支援事業）

令和6年2月8日

支出負担行為担当官

文部科学省初等中等教育局長 殿

（受託者）住 所 広島県広島市中区国泰寺町
一丁目6番34号

名称及び 広島市

代表者名 市長 松 井 一 實

令和6年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」に関する実施計画書を以下のとおり提出いたします。

記

1 事業の概要

（1）学際領域学科又は地域社会学科等を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 (ふりがな)	学科の種類	設置（予定） 年度	決定
広島市立	美鈴が丘高等学校 (みすずがおかこうとうがっこう)	地域社会学科	令和7年度	

※学科の種類は学際領域学科又は地域社会学科、その他普通科の別を記載すること。

※設置（予定）年度は令和5年度、令和6年度又は令和7年度を記載すること。

※教育委員会等における決定を経ている等、組織として設置が決定している場合には、「決定」欄に○を付すこと。

（2）学校の詳細

課程別	新学科の 収容定員	学年制・ 単位制の別	学科の名称（決定している場合）
全日制	720人	学年制	未定

※課程別は、全日制・定時制・通信制の別を記載すること。

（既存の学科を転換する場合は、以下も記載）

現在の生徒数	現在の学科の種類	現在の学科の名称
707人	普通科	普通科

(3) 当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

申請校は、学校教育目標を「校訓『進取 友愛 節度』のもと、高い志を持ち、変化の激しい社会において自らの未来を切り拓き、『地域共生社会』の担い手となる人材を育成する。」と設定し、新しく地域社会学科として特色・魅力ある先進的な教育の取組を行うこととしている。

1 育成を目指す資質・能力

学校教育目標に基づき、スクール・ポリシーの1つである、育成を目指す資質・能力を以下の様に設定している。

「国際平和文化都市『広島』をフィールドとした学びにより
地域社会の発展に貢献し続ける人物を育成する」

- 地域や社会の課題を見出す力（情報収集力・情報分析力・発信力）
- 正解のない課題に向き合い続ける力（自分力・行動力・思考力）
- 協同して課題を解決する力（調整力・実践力・連携力）

2 申請校における特色・魅力ある先進的な教育の取組

学校教育目標及び育成する資質・能力を踏まえ、令和7年度から現在の普通科を改編し、広島市が有する課題や魅力に着目した実践的な学びに取り組む、「探究的な活動」を特色（学びの柱）とした学校とする。

(1) 新たな学校設定教科・科目の開設（1学年2単位）

- ・ 学びの柱である探究の「学び方を学ぶ」ためのプログラムを実施

(2) 探究活動を重視した各教科・科目の授業改善

- ・ 全各教科・科目で「育成を目指す資質・能力」に基づく目標と評価規準を設定
- ・ 生徒の「問い」から始まり、「社会につながる課題」を個人思考と協同学習で学ぶ授業へと改善

(3) 総合的な探究の時間（2～3学年計3単位以上）

- ・ 週1日は探究に特化した日をつくり、午後から学年の枠を超えたフィールドワークや課題解決学習等に集中できるよう設定（学校設定教科・科目と合わせて設定することも検討）
- ・ 探究的な活動の成果を発信する機会を設け、広島だけでなく全国に発信（校内探究活動コンテスト、市議会提案発表会、全国高校生マイプロジェクトアワード等）
- ・ 探究的な活動を支援するための連携協力体制（コンソーシアム）を現行の学校運営協議会を充実させて整備（大学教授や行政機関職員等を新たに委員として招聘）
- ・ 学校と連携協力体制（コンソーシアム）をつなぐコーディネーターを配置
- ・ 探究のテーマは生徒が主体的に決定する。

＜テーマのイメージ＞

- 隣接する小・中学校で校種を超えた授業や学校行事等の企画・運営を行う。
- 医療施設や医療専門学校と連携し地域医療の諸課題について検討する。
- 近隣の大学等と連携し地域の諸課題を情報科学によって解決する方策を検討する。

(4) 先進的な学校運営

- ・ 担任チューター制や複数担任制などの柔軟な学級運営の導入、文理選択の廃止、修学旅行の充実等

2 事業の目的等

(1) 学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科等を設置する必要性

1 申請校を取り巻く状況

申請校は生徒急増期である昭和63年4月に当時の新興住宅地内に開校した学校であり、同名の小学校・中学校と道路を挟んで隣接している。

平成13年には普通科内に国際理数コースを設立したが、平成21年改訂高等学校学習指導要領において理数教育の充実が図られたこと等を受けて平成24年にコースの募集を停止し、令和5年現在まで普通科のみを設置している。

本市が設置している高等学校の内、普通科高校は4校あり、当該校以外は全て普通科内にコースを有し、コースを中心とした学校の特色化を図っている。コースを設置している学校では、社会構造の変化に対応した教育課程の編成や地域に開かれた教育活動等を通して特色化を図っているが、当該校は唯一普通科のみを設置している学校であるため、学校の特色化が図りにくい状況にある。

この状況の中で、申請校は平成27年度から本市指定校として主体的・対話的で深い学びの実現や総合的な探究の時間の改善に取り組み、生徒を主体とした協同学習や地域の課題や魅力に着目した探究活動を実施している。

近年、当該校が所在する住宅地内に居住する児童生徒数は減少していることに加え、近隣の私立高校の共学化や魅力化等により、当該校の志願倍率は令和5年度入試で1.04倍と過去最低を記録している。

〔参考〕他の本市普通科高校に設置しているコース

〔 普通科創造表現コース（美術系） 普通科体育コース（体育系）
普通科国際コミュニケーションコース（国際系） 〕

2 本市高等学校及び申請校の将来構想

本市は、平成28年度に魅力ある高校づくりを推進するため、市立高等学校の将来構想として「広島市ハイスクールビジョン」、ビジョンに基づく具体的な行動計画として「ハイスクールビジョン推進プログラム」を策定し、令和4年に社会経済情勢の変化に柔軟に対応するため、中間見直しを行った。

申請校は、令和4年に一部改定した「広島市ハイスクールビジョン」及び「ハイスクールビジョン推進プログラム」において、普通科を新たな学科へと改編することを含めた特色ある新しい学校教育活動を推進することとしている。

3 地域社会学科を設置する必要性

申請校は、学校教育目標に「地域共生社会の担い手となる人材を育成する」ことを明記し、「総合的な探究の時間」の中で学校が所在する住宅地や生徒自身が居住する地域の魅力を紹介する探究活動等、地域と連携した特色ある取組を進めている。これらの取組は地域から歓迎され、参加する生徒の主体性や自己肯定感の醸成につながるとともに、課題の発見と解決を図る力や、新しい価値を創造する力など、持続可能な地域社会の創り手となることができる資質・能力の育成にもつながっている。

申請校はこれまで普通科として、大学受験等を意識した指導を中心としているが、前述の探究的な取組による生徒の変容や地域の活性化が図られたことにより、地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な学びが、学校・生徒・地域にとって効果的であるという実感を持ち始めている。

今後は、隣接する小・中学校や市の行政機関、大学等と連携協力体制を構築した上で、高校生が広島市域全体でフィールドワークを行い、様々な地域の魅力発信や課題解決を主体的に行うことで、持続可能な地域社会の将来を担う人材を育成する新たな普通科へと改編し、学校の特色化・魅力化を確実に推進する必要がある。

(2) 学際領域学科又は地域社会学科等における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科等における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

1 申請校の学校教育目標及び育成を目指す資質能力

申請校は、本市の目指す教育の方向性や申請校の将来構想を踏まえ、学校教育目標を令和4年に改訂し、「校訓『進取 友愛 節度』のもと、高い志を持ち、変化の激しい社会において自らの未来を切り拓き、『地域共生社会』の担い手となる人材を育成する」こととしている。

この学校教育目標に基づき、地域社会学科で育成を目指す資質・能力のコンセプトを「国際平和文化都市『広島』をフィールドとした学びにより地域社会の発展に貢献し続ける人物を育成する」とし、具体的には、地域や社会の課題を見出す力、正解のない課題に向き合い続ける力、協同して課題を解決する力を育成することを検討している。

2 目標達成に至る申請校の取組

以上の学校教育目標の実現及び資質・能力の育成のために、申請校は地域社会学科として、広島市域を学びのフィールドとする探究活動を柱とした学びを提供する学校として学科改編を行う。

まず、入学者選抜において、広島県公立高等学校入学者選抜の特色枠の活用や面談形式で全受検者に実施する「自己表現」の配点の比重の設定等により、自らを認識し表現することができる生徒も受け入れる体制を構築する。

1年次には2時間連続の学校設定教科・科目により、生徒自らの興味や適性等による探究テーマの模索と共に、探究活動に必要なスキルと手法の習得、探究を行う上で不可欠な他者と協創する態度や自己を成長させるマインドセットについて学ぶことで、探究学習により生徒が確実に資質・能力を伸ばすことができる基盤をつくる。

同時に、全学年の各教科・科目の授業を探究型学習とし、生徒の個々の「問い」から「社会につながる課題」を学ぶ授業を展開し、生徒が主体的に教科横断的な視点を持つことを促す、社会に開かれた学びを全授業で展開していく。

主に2、3年次に2時間連続で取り組む総合的な探究の時間は、1年次の学校設定教科・科目と時間割を同時帯で設定することで全学年が縦割り活動に取り組める形式とし、地域の資源をコンソーシアムの支援を受けながら活用して生徒が主体的に「広島市域全域で学ぶ」体制をつくる。また、社会と接続しながら自らのキャリア形成の方向性と結びつけるよう、探究テーマを設定する。具体的なイメージとしては、隣接する小・中学校で校種を超えた授業や学校行事等の企画・運営を行うことで教育系キャリアに、医療施設や医療専門学校と連携し地域医療の諸課題について検討することで医療系キャリアに、近隣の大学等と連携し地域の諸課題を情報科学によって解決する方策を検討することで情報系キャリアに結びつけられるような探究テーマを設定する。ただし、探究のテーマは生徒が社会と接続していくなかで、1年次の学校設定教科・科目で行った自らの興味や適性等による探究テーマの模索を参考としながら主体的に設定する。

また、探究的な活動の成果は、校内の探究活動コンテストや高校生による広島市議会提案発表会、全国高校生マイプロジェクトアワードなどを通して全国に発信するとともに、フィードバックを通して探究の内容を深化させていく。

最終的には、全ての生徒が全世界を含む地域社会と接続した形で自らの在り方生き方を認識した上で、キャリア形成に結びつく進路実現に主体的に向かうことができる姿へと変容を果たす。具体的には大学受験では総合型選抜により受験する生徒の増加、志望進路も地域創生系の学部を持つ大学を志望する生徒の増加等を図るとともに、大学等卒業後は広島を含む全地域の持続可能な発展に寄与する人材を育成することを目指す。

3 実施体制

(1) 管理機関における実施体制や事業の管理方法

本市教育委員会では、平成27年度から申請校に設置されている校内委員会（将来構想検討委員会等）に指導主事が参加し、学校を主体としつつ教育委員会と連携しながら事業に取り組む体制を構築できている。本事業においてもこの体制を継承しつつ、以下の通り適切に事業を管理する。

1 管理機関における実施体制

(1) 広島市教育委員会（管理機関）

広島市教育委員会を管理機関とし、広島市教育委員会内部に設置されているハイスクールビジョン推進委員会が管理の主体となる。

また、申請校内に設置されている「拡大未来会議」に広島市教育委員会の指導主事が参加する体制を構築する。

※ ハイスクールビジョン推進委員会は本市ハイスクールビジョン推進のために設置された指導担当部長を座長とする組織であり、教育委員会関係課（指導第二課、教育企画課、教職員課、学事課、施設課等）の課長が構成委員である。

(2) 運営指導委員会

広島市教育委員会は、外部有識者で構成される「運営指導委員会」を設置し、学校からのヒヤリングによる事業計画の進捗状況などの把握、評価・検証を依頼する。

2 事業の管理方法

(1) 広島市教育委員会による業務の進行管理等

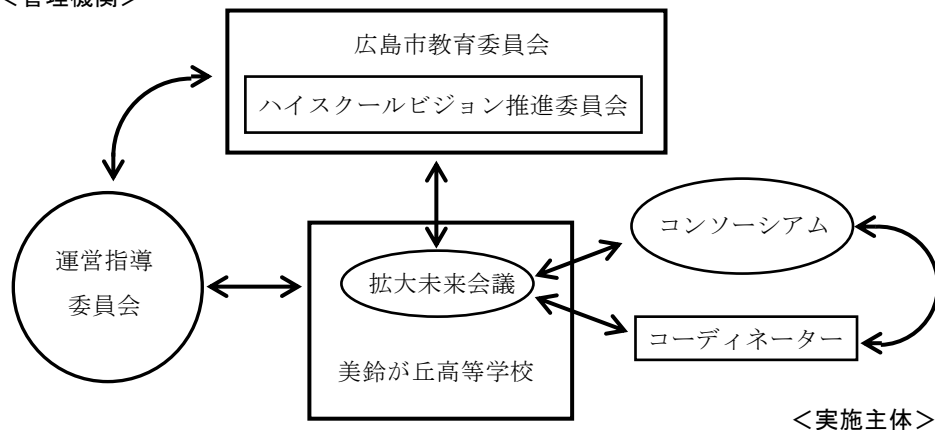
広島市教育委員会内部に設置しているハイスクールビジョン推進委員会において、運営指導委員会による学校ヒヤリングの結果、校内の拡大未来会議に参加している指導主事等による成果と課題の取りまとめを報告することで、校内の事業の進捗状況を共有し進行管理を行う。

また、ハイスクールビジョン推進委員会において成果と課題の分析も行い、実施主体である学校やコーディネーター、コンソーシアムにフィードバックする。

(2) 運営指導委員会による指導・助言

運営指導委員会は年3回実施し、学校から事業計画の進捗状況についてヒヤリングを行い、成果や課題について指導助言を行う。

<管理機関>



(2) 管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

教育委員会内部に設置したハイスクールビジョン推進委員会にて、新学科への改編の状況を共有し、事業全体の成果を検証するとともに、課題の解決に向けた支援を必要に応じて行う体制を構築する。

1 検証方法

(1) 運営指導委員会ヒヤリング

運営指導委員会による学校ヒヤリングの結果を、ハイスクールビジョン推進委員会に共有する。

(2) 拡大未来会議取りまとめ

拡大未来会議に参加する指導主事による成果と課題の取りまとめを、ハイスクールビジョン推進委員会に共有する。

(3) 学校が実施するアンケート

学校が実施している教員対象取組改善アンケートや生徒対象取組評価アンケートにより、教員や生徒の学校改革に関する意識の変容に関する分析結果をハイスクールビジョン推進委員会に共有する。

(4) 民間の評価システム

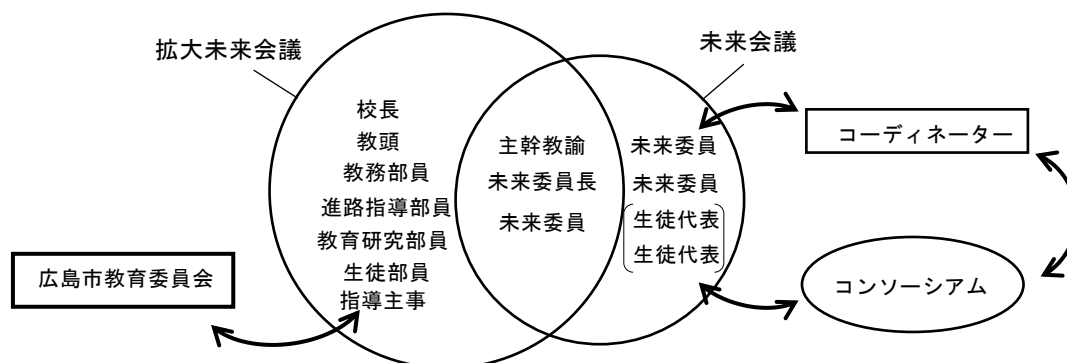
民間の評価システム「Ai GROW（IGS 株式会社）」により、学校が育成を目指す資質・能力の変容に関する分析結果をハイスクールビジョン推進委員会に共有する。

2 検証の時期

ハイスクールビジョン 推進委員会	運営指導委員会	拡大未来会議	アンケート	Ai-GROW
5月 ○第1回委員会 ←		4～5月 ○取りまとめ		4月 ○第1回実施
	6月 ○第1回委員会 8月 ○第2回委員会 ←		6月 ○第1回実施	
9月 ○第2回委員会 ←		6～9月 ○取りまとめ		9月 ○第2回実施
	2月 ○第3回委員会 ←	9～3月 ○取りまとめ	1月 ○第2回実施	2月 ○第3回実施
3月 ○第3回委員会 ←				

(3) 学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校における事業の管理方法

申請校における学科改編検討を円滑に行うため、校内に「拡大未来会議」と「未来会議」を設置し、管理職、広島市教育委員会、コンソーシアム、コーディネーターとの連携により本事業を適切に管理する。



1 拡大未来会議

管理職と広島市教育委員会指導主事、関係分掌の主任等による「拡大未来会議」を設置し、学科改編の事業実施主体となる「未来会議」の検討状況や提案内容を把握し、適切に管理する。開催頻度は月1回程度とする。

2 未来会議

主幹教諭、未来委員長（教育研究主任）、未来委員（3名）、生徒代表（必要に応じて参加、2名）による「未来会議」を設置し、主に学科改編の事業実施主体として、学校教育目標や育成する資質・能力に基づいた事業計画を作成し、拡大未来会議へ提案を行う。未来会議専用の職員室（未来会議室）を新たに設置し、未来委員長と未来委員、コーディネーターの席を設ける。また、未来会議はコンソーシアムやコーディネーターとの連携の窓口となり、定期的に行う意見交換を踏まえて事業計画や実施方法について検証、見直しを行う。開催頻度は週1回程度とする。

3 コンソーシアムやコーディネーターとの連携

コンソーシアムは未来会議を窓口として定期的に学校と意見交換を行う。特にコーディネーターは未来会議室に席を設けることで常時助言を行うことができる体制を整える。また、コンソーシアムは学校評価を担う学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を充実させて整備し、学校評価（学校経営計画）の評価項目の一つに学科改編の検討状況の項目を設けることで本事業を管理する。

4 広島市教育委員会との連携

広島市教育委員会は、委員会内部に設置したハイスクールビジョン推進委員会において、事業を管理するが、拡大未来会議に参加する指導主事はその窓口となる。拡大未来会議に参加する指導主事は学校に指導・助言を行い、本事業を適切に管理する。特に学科改編の実施事業主体となる未来会議の実施計画の進行管理を担う。

(4) 管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

1 管理機関における実績

- (1) 国立教育政策研究所 教育課程研究指定校事業
平成29年度指定 音楽 黄金山小学校
平成30年度指定 音楽 黄金山小学校
平成31年度指定 家庭科 瀬野川中学校
令和2年度指定 家庭科 瀬野川中学校

2 申請校における実績

申請校は、平成27年度から令和4年度まで本市学力向上研究指定校として、主に主体的・対話的で深い学びの実現に向けて8年間研究を積み重ねてきた。

- (1) 平成27年度広島市学校経営推進サポート事業「学力向上推進プラン」指定校
知識・技能を活用し生涯学び続けていこうという意欲の向上と課題探究・解決を目指す能動的学習（いわゆるアクティブ・ラーニング）の研究を本市高等学校において初めて行った。
- (2) 平成28年度広島市立高等学校学力向上推進事業研究指定校
演習・対話・討論を取り入れた、課題発見とその解決を目指す能動的学習の研究を継続し、学校全体での組織的な取組として、学校の基盤となる学習法として推進した。
- (3) 平成29年度広島市立高等学校学力向上推進事業研究指定校
能動的学習を学校全体の取組として継続し市立高等学校全体に普及させるとともに、総合的な探究の時間を軸とした課題発見と解決を目指す教科横断的な探究型学習の在り方に研究を行った。
- (4) 平成30年度広島市立高等学校学力向上推進事業学力向上研究校
能動的学習について、豊かで深い学びを創造するために多様な授業方法を学校全体の取組として研究を行った。また、学習意欲向上に資する評価方法としてルーブリック評価表等の在り方について研究を行った。
- (5) 平成31年度広島市立高等学校学力向上推進事業学力向上研究校
能動的学習を中心とした主体的かつ協同的に学ぶ集団を形成するための多様な授業方法の研究を行った。また、生徒主体の「考える授業」とそれに連動した「適切な評価」による授業の在り方について研究を行った。
- (6) 令和2年度広島市立高等学校学力向上推進事業学力向上研究校
これまでの能動的学習をより深化・具体化させた協同学習を中心に据えた持続的な授業改善について研究を行った。
- (7) 令和3年度広島市立高等学校学力向上推進事業学力向上研究校
新しい時代に求められる力を身に付けるための豊かで深い学びの創造をテーマとし、協同的・主体的に学ぶ集団づくりのための多様な授業方法の研究と一人一台端末を活用した豊かで深い学びの創造について研究を行った。
- (8) 令和4年度広島市立高等学校学力向上推進事業学力向上研究校
新しい時代に求められる力を身に付けるための豊かで深い学びの創造を引き続きテーマとし、個の学びの深化を促す協同的な学びの創出と課題を発見し、解決を目指して主体的に粘り強く取り組む探究的な学びの創出について研究を行った。

(5) 運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
広島県立叡啓大学	保井 俊之	ソーシャルシステムデザイン学部学部長・教授
広島県立広島大学	向居 暁	地域創生学部教授
岡山県青少年教育センター閑谷学校	香山 真一	所長 CSマイスター 元中央教育審議会臨時部会委員
広島市立大学キャリアセンター	小林 俊文	キャリアアドバイザー 元美鈴が丘高等学校長
広島市教育委員会	中谷 智子	広島市教育委員会指導担当部長

(6) 運営指導委員会が取り組む内容

- 事業主体である学校及び管理機関である広島市教育委員会に対して指導助言を行う。
- ・ 育成を目指す資質・能力の検証について
 - ・ 市立高校と大学間の連携強化（探究的な学びの協同実施、単位認定等）
 - ・ 市が所管する地域資源や人的ネットワークを活用した教育方法について
 - ・ 教科等横断的・探究的な学びを充実し、幅広い進路選択に対応する教育課程について
 - ・ 学校改革に資する人材交流・人材活用等について
 - ・ 運営・検証に生徒が主体的に関わる組織体制の構築について

4 学際領域学科又は地域社会学科等における取組

(1) 学際領域学科又は地域社会学科等におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容（学校設定教科・科目の詳細は別添1「学校設定教科・科目の設定に関する説明資料」に記載。）※教育課程表は添付資料として提出すること。

申請校は「国際平和文化都市「広島」をフィールドとした学びにより地域社会の平和と発展に貢献し続ける人物を育成する」ことを目標として掲げるが、入学する生徒の全てが学校外での主体的な学びに適応しているわけではないため、入学者選抜において、広島県公立高等学校入学者選抜の特色枠の活用や面談形式で全受検者に実施する「自己表現」の配点の比重の設定等により、自らを認識し表現することができる生徒も受け入れる体制を構築した上で以下のようなカリキュラム及び学習方法等により3年間を通した生徒の育成を目指す。

1 学校設定教科・科目『未来計画』の新設

1年次に2単位で必修として実施する。生徒自らの興味や適性等による探究テーマの模索（キーワード「自己を見つめ、自分の好きを発見する」）と共に、探究活動に必要なスキルと手法の習得を行う。これらに加えて、探究を行う上で不可欠な対人スキルトレーニング（ソーシャルスキルトレーニング等）により他者と協創する態度を育成することや自己を成長させるマインドセット（レジリエンス等）について学ぶことで、探究の型だけでなく、探究のサイクルにより内容が深化してく状態とし、探究学習により生徒が確実に資質・能力を身に付け伸ばしていくことができる基盤をつくる。

2 探究活動を重視した各教科・科目の授業改善

これまで申請校が行ってきた主体的・対話的で深い学びや協同学習を発展させ、生徒の個々の「問い」から、「社会につながる課題」を学ぶ授業を展開し、教科書内の知識の習得に留まらず、生徒が社会を通して教科横断的な視点を持つことを促していく。具体的には、生徒は「問い」や「社会につながる課題」に対して、「個人で深める」・「他者と協同して深める」・「専門家（教師・各種講師）にアクセスして深める」といった選択肢から生徒自身が選び学び続ける環境づくりを実現する。その際、授業内に留めず課外時間や家庭学習等も活用する。また、「個人で深める」学びのために学習支援サービス等を活用し、個別最適な学びを実現した上で、「他者と協同して深める」などで協働的な学びも一体的に充実させる。「専門家（教師・各種講師）にアクセスして深める」には学校の教職による助言だけでなく、外部の有識者とオンラインでの接続や、大学講師の出張授業を行うことなどを含め、社会につながるオープンな学びを充実させる。

3 総合的な探究の時間の充実

2学年および3学年の総合的な探究の時間を2単位連続で設定し、1学年の学校設定教科・科目『未来計画』と併せて、全学年が縦割りで週1日の午後を探究に専念することができる日を設ける。広島市域を学びのフィールドと位置づけ、地域の資源をコンソーシアムの支援を受けながら活用して地域が主体的に「地域で学ぶ」体制（「地域を学ぶ」ではない）をつくる。探究のテーマは生徒自身の興味・関心があるだけでなく、社会と接続しながら自らのキャリア形成と結びつけられるよう主体的な設定を促す。探究的な活動の成果は、校内探究活動コンテスト、高校生による広島市議会提案発表会、全国高校生マイプロジェクトアワードなどを通じて、広島をフィールドとした学びを全国に発信する。

(2) コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

1 連携・協力体制の構築の考え方

申請校と関係機関の間で、お互いの利益（Win-Win）となる関係を構築し、持続可能な事業展開を目指す。（関係機関の利益は括弧内で記す。）

2 関係機関等との連携の方法

(1) 大学との連携

生徒を対象とし、探究活動に必要な専門的知識や技能を伝える特別講義を実施する。（大学の広報や進学者の増加等につながる。）

教員を対象とし、授業や探究でのファシリテーターとして教師が振舞う技能を習得するための研修会を実施する。（大学の広報や研究等につながる。）

(2) 地域の幼稚園・小・中学校との連携

申請校の生徒が地域の幼稚園・小・中学校に出向き、授業や総合的な学習の時間の学習支援や部活動支援、学校行事の活性化等に取り組む。（幼稚園・小・中学校の学びの充実につながる。）

(3) 地域おこしの推進を主とする行政との連携

地域の課題を探究活動のテーマとすること、探究の成果を商店街や公民館で発信することを推進する。（高校生視点のアイデアによる地域振興や、UIJ ターン就職の可能性を広げることにつながる。）

(4) 広島市佐伯区との連携

フィールドワークや実践の場を提供していただく。（高校生視点のアイデアによる地域振興や、地域イベントを生徒が企画・運営することによる地域活性化につながる。）

部活動指導員や特別講義の講師等、生きた学びを伝える人材を派遣していただく。（学校施設の地域共同利用や高校生との交流による地域活性化につながる。）

(3) コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
広島経済大学	胤森 裕暢	教養教育部教授
広島市立大学	卜部 匡司	国際学部教授
広島工業大学	溝上 健文	アドミッションセンター広報参事 元広島県立高等学校長
ドラゴンフライズ広島	浦 伸嘉	代表取締役
美鈴が丘高等学校 PTA	織田 絵美香	保護者代表
美鈴が丘公民館	河部 哲郎	館長
佐伯区役所	吉村 正美	市民部地域おこし推進課課長
美鈴が丘高等学校	代表生徒 2 名程度	※議題等の内容に応じて招集

(4) 配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名
公募中	公募中

当該者の主な実績

公募中

コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

〔勤務形態〕 臨時的任用教諭 〔勤務日〕 平日の毎日 〔取組内容〕 (1) 学校の探究活動に関するコーディネート業務 ・ 生徒が探究活動を行う際の外部機関（大学・企業・地域・行政機関等）との連携・協働 ・ 探究活動の指導・支援、カリキュラム・マネジメント、計画策定・実施体制構築、企画立案、運営支援 (2) 教育課程外の探究活動に関するコーディネート業務 ・ 教育課程外での探究学習環境、活動機会への接続 (3) 探究活動に関わる協働体制の運営・経営に関するコーディネート業務 ・ 地域や社会等の外部との協働組織体制（コンソーシアム）の構築と運営 ・ 外部資源（人材、資金等）の確保、外部機関（大学・企業・地域・行政機関等）との連携 (4) その他、学校長が必要と認める業務
--

(5) 学際領域学科又は地域社会学科等の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

1 生徒への説明

- ・ 7月24日（水）全校集会を実施し、令和7年度からの新学科について新たな取組を実践することを説明する。
- ・ 未来会議に生徒の代表が可能な限り参加し、事業内容を把握する。また、コンソーシアム会議で審議した内容は生徒会役員や新聞文芸部員の広報活動によって全生徒に告知する。

2 保護者への説明

- ・ 5月11日（土）PTA 総会にて、令和7年度からの新学科について新たな取組を実践することを説明する。また、同内容の文書の配付及び電子メール等の配信によって全保護者へ周知する。

3 申請校を志願する中学校生徒及びその保護者への説明

- ・ 8月1日（木）に佐伯区のホール会場にて新学科についての説明会を中学生生徒及びその保護者を対象として行い、生徒及び教職員が探究活動等について説明するとともに、大学の教授を同説明会に招聘し申請校で実施される新しい学びが大学での学びにもつながるものであることについて講演いただく。
- ・ オープンスクール及びミニオープンスクールでは本校生徒が企画・運営する説明会を実施し、検討内容や探究活動の取組を報告するとともに、学校設定教科・科目『未来計画』の体験授業を実施する。

4 同窓会への説明

- ・ 申請校の校長が中心となって同窓会の代表を通して同窓生に説明を行う。

5 地域への説明

- ・ 学校開放日（5月11日（土）のPTA 総会、9月7日（土）のオープンスクール、10月12日（土）のミニオープンスクール、3月12日（水）の探究発表会）において、令和7年度から新学科を設置し、新たな取組を実践することを説明する。
- ・ 地域等からの希望に応じて説明会を実施する。
- ・ 広島市および本校 web ページにコンソーシアム会議における検討内容、令和7年度に向けた学校における取組の様子等を掲載する。

5 実施計画

(1) 2ヶ年の実施計画の概要

[令和6年度]

- 4月 ☐ 学校設定科目【未来計画】の実施
☐ 民間アセスメントツール (Ai GROW) 第1回実施
- 5月 ☐ 新学科について掲載した広報物等の作成・配布
☐ 第1回ハイスクールビジョン推進委員会の開催
☐ 第3学年「地域探究フィールドワーク」実施
- 6月 ☐ 新学科名・入学者選抜実施内容発表、教育課程の完成、新学科教書採択
☐ 第1回運営指導委員会の開催
☐ 第1回コンソーシアム会議の実施
☐ 第1回教員対象取組改善アンケート及び生徒対象取組評価アンケートの実施
- 7月 ☐ 3学年地域探究発表会
☐ 第1回高校魅力化アンケート
☐ 1学年「地域探究フィールドワーク」実施
- 8月 ☐ 第2回運営指導委員会の開催
☐ 大学等と連携した新学科に関する説明会の実施
- 9月 ☐ 第2回ハイスクールビジョン推進委員会の開催
☐ オープンスクールでの中学生向けミニ探究発表会の実施
☐ 民間アセスメントツール (Ai GROW) 第2回実施
- 10月 ☐ 入試要項発表
☐ 第2回コンソーシアム会議の実施
- 1月 ☐ 第2回教員対象取組改善アンケート及び生徒対象取組評価アンケートの実施
☐ 第2回高校魅力化アンケート
☐ マイプロジェクトアワード等の外部コンテストへの参加
- 2月 ☐ 選抜試験
☐ 民間アセスメントツール (Ai GROW) 第3回実施
☐ 第3回コンソーシアム会議、第3回運営指導委員会の開催
- 3月 ☐ 1・2学年地域探究発表会
☐ 年間評価
☐ 第3回ハイスクールビジョン推進委員会の開催

[令和7年度]

- 4月 ☐ 新学科運営開始（年次進行）
- ※ 在校生2・3年生と連携した探究活動の推進
- ※ 年次進行による教育内容の充実
- ※ コンソーシアム会議、運営指導委員会、ハイスクールビジョン推進委員会による新学科の取組評価及び未来会議を中心としたカリキュラム・マネジメントの実施
- ※ 指定終了後の継続運営のための予算要求等の検討

(2) 今年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	<未来会議> ・学校設定科目【未来計画】の実施 ・民間アセスメントツール (Ai Grow) 第1回実施	
5月	<未来会議> ・3学年地域探究フィールドワーク <教員研修> ・評価と指導の一体化と育成を目指す資質 ・能力について	・第1回ハイスクールビジョン推進委員会 (広島市教育委員会)
6月	<教員研修> ・授業における問いのデザイン <その他> ・第1回教員対象取組改善アンケート ・第1回生徒対象取組評価アンケート	・第1回運営指導委員会 ・第1回コンソーシアム会議 (フィールドワークや学校開放等での連携協力依頼)
7月	<未来会議> ・探究発表会 (3学年) の実施 ・発表会の成果と課題の取りまとめ ・先進校視察引率 <その他> ・先進校視察 (熊本市立必由館高等学校)	・探究発表会 (3学年) (コンソーシアム委員や地域の方々へ公開) ・他都市指定校との意見交換 (学校間だけでなく、生徒間でも意見交換し有機的に連携)
8月	<未来会議> ・1学年地域探究フィールドワーク <教員研修> ・授業観察期間の授業実践計画	・第2回運営指導委員会 ・大学等と連携した新学科に関する学校説明会の開催
9月	<未来会議> ・民間アセスメントツール (Ai Grow) 第2回実施 ・文部科学省指定校中間成果発表会 <教員研修> ・授業観察期間① (～12月末)	・学校開放 (オープンスクール) (コンソーシアム委員や地域の方々へ公開) ・第2回ハイスクールビジョン推進委員会
10月	<未来会議> ・先進校視察引率 <教員研修> ・広島市立高等学校研究授業 <その他>	・学校開放 (ミニオープンスクール) ・他都市指定校との意見交換 (学校間だけでなく、生徒間でも意見交換し有機的に連携) ・第2回コンソーシアム会議 ・入試要項発表

	・先進校視察（北九州市立高等学校）	
1 1 月	<未来会議> ・1 学年平和探究フィールドワーク ・先進校視察引率 <教員研修> ・協同学習授業研修会 <その他> ・先進校視察（京都市立開建高等学校）	・他都市指定校との意見交換（学校間だけでなく、生徒間でも意見交換し有機的に連携）
1 2 月	<未来会議> ・学校設定教科・総合的な探究の時間の年間指導計画の改善 <教員研修> ・教科における探究的な学びについて	・次年度のコンソーシアム委員及びコーディネーターの検討
1 月	<未来会議> ・令和6 年度成果物取りまとめ（～3 月中旬） ・マイプロジェクトアワード等への引率 <教員研修> ・授業及び校務における ICT 活用 <その他> ・第2 回教員対象取組改善アンケート ・第2 回生徒対象取組評価アンケート	・次年度のコンソーシアム委員及びコーディネーターの決定
2 月	<未来会議> ・次年度実施計画の策定 <その他> ・民間アセスメントツール（Ai Grow）第3 回実施	・第3 回コンソーシアム会議 ・第3 回運営指導委員会
3 月	<未来会議> ・探究発表会（1・2 学年）の実施 ・年間評価 <教員研修> ・先進校視察及び研究会参加報告	・第3 回ハイスクールビジョン推進委員会 ・探究発表会の公開（コンソーシアム委員や地域の方々へ公開）

（３）事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み（事業のアウトプットやアウトカムの考え方、目標指標の設定は別添２「目標設定シート」に記載。）

本事業のアウトプットは、運営指導委員会ヒヤリング、拡大未来会議取りまとめ、教員及び生徒対象アンケート、民間の評価システム「Ai GROW」を中心にハイスクールビジョン推進委員会に対して行う。また、生徒の探究生徒発表会に参加するコンソーシアム委員等からの聞き取り等もアウトプットとして加え、本事業の進捗の確認や改善として活用する。

１ 事業の進捗状況の定期的な確認の仕組み

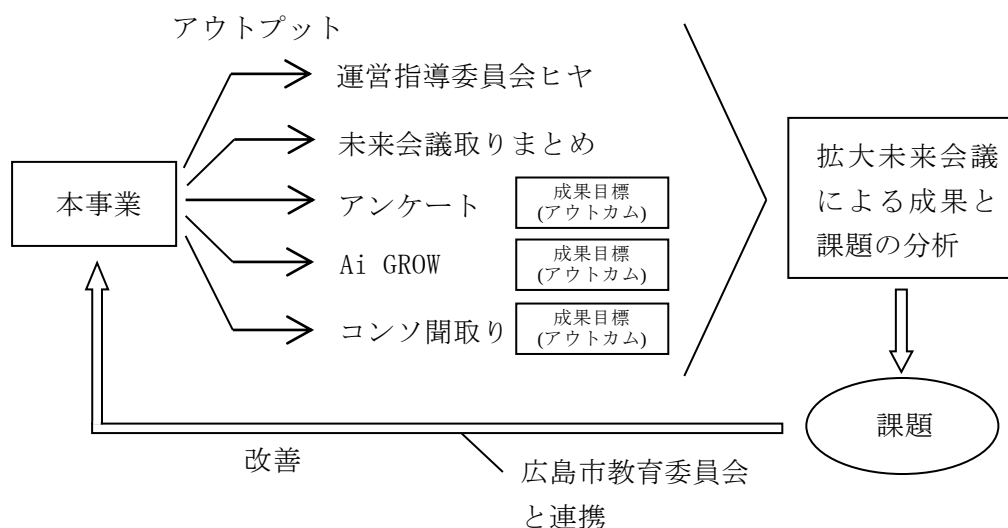
ハイスクールビジョン推進委員会（年３回開催）において、運営指導委員会ヒヤリング（年３回開催）、拡大未来会議取りまとめ（年３回）より本事業の進行管理を行う。また、コンソーシアム会議（年３回開催）においても申請校が進捗状況を報告する仕組みを構築する。

２ 事業の改善の仕組み

拡大未来会議において、申請校が育成を目指す資質・能力が伸長しているかどうか、本事業のアウトプットを分析することにより評価する。具体的には、教員及び生徒対象アンケート（年２回６月、１月実施）と、生徒の探究発表会に参加するコンソーシアム委員等からの聞き取り等（年２回７月、２月実施）の項目を、資質・能力の伸長に関連したものとする。また、民間の評価システム「Ai GROW」（年３回４月、９月、２月実施）の測定項目にも申請校が育成を目指す資質・能力を事前に設定し、アンケートや聞き取りによる成果や課題の分析を客観的に裏付けるものとして位置付ける。

課題については、拡大未来会議において、以下の視点等により改善の検討を行い、必要に応じて管理機関である広島市教育委員会と連携して課題解決を図る。

<改善イメージ>



6 成果の普及のための仕組み

1 広島市教育委員会主催の教育イベントにおいて全国へ発信

- ・広島市教育委員会主催の教育イベントを開催し、本校生徒による先進的な取組に関するプレゼンテーションやコーディネーター等によるパネルディスカッションを行い、全国に向けて本市の先進的な取組を発信する。

2 成果発表の場を広げる

- ・生徒の探究活動の成果を発表する取組として、他の高等学校の生徒とともに意見交換会や成果発表会を実施する（10月に実施する高校生による広島市議会提案発表会等）。
- ・7月、3月に実施する校内探究発表会に県内小学生、中学生、高校生、教職員、関係機関の職員、地域住民等を招いて、成果の普及、共有、提言、実践の場として活用する。
- ・地域の小学校や中学校へ訪問して行う学校説明会及び体験授業に、本校生徒も講師として参加し、取組発表や探究の模擬授業を行う。

3 本校 web ページの活用

- ・探究活動の成果物や探究発表動画、パンフレット等を本校 web ページに掲載する。
- ・大学、地域と連携した取組について、本校 web ページに掲載する。

7 国の指定終了後の取組継続のための仕組み

取組を継続していくため、改編の効果を検証し新しい普通科の在り方について必要に応じて柔軟に見直しを図る仕組み、学校内部から改革を推進する仕組み、設置者である教育委員会からの人的支援や物的支援を行う仕組みを構築する。

1 ハイスクールビジョン推進委員会による検証

ハイスクールビジョン推進委員会において、改編の効果を検証し、構成委員からの助言により随時見直しを図る。また、人的支援や物的支援についても検討し、国からの補助が終了した後でも学校の体制を維持するための予算措置を検討する。特に、コーディネーターの配置については国の加配が無くても継続して配置できるように検討する。

2 校内の未来会議及び拡大未来会議の維持

校内に設置された未来会議・拡大未来会議を維持し、国の指定終了後であってもハイスクールビジョン推進プログラムに基づいた魅力ある学校づくりができるような推進体制を維持する。

3 コンソーシアムの維持

国の指定終了後もコンソーシアムを維持し、改編の効果検証や構成委員からの助言により随時見直しを図る。